

1 芝辻理右衛門口上(前欠)

延宝七(一六七九)年七月

(前欠)

御座候御事

一御国ニ手代為相詰置候義ハ、先以御用」為御細工之、其以前
御祖父隼人正殿」私祖父ニ■■被仰付候ハ、其方儀既」公方
様御存知之者御公用相勤申」者之儀ニ有之故、不罷成候間、
惣領悴」之義も、其方跡役可相勤之間、次男ヲ」御國江差
上ケ候様ニと被仰付候ニ付、奉畏」御請申上候處ニ祖父悴
式人所持仕候」内、其後惣領之悴致病死候故、御」祖父隼
人正殿ハ其御断申上候得者、」然上ハ無是非間、手代為相詰
置候」様ニと被仰付候故、右之謂ヲ以尔今」手代為相詰置
申候御事

一御公方様江御代々乍恐私儀先祖ら」御目見江仕来候儀ハ、

(碑、以下同)

大坂御 陳 其以」前る 権現様私祖父度々被」為 御召出
御細工被為 仰付候所ニ別而 御上意相叶、其上先祖者」
備前国菊一文字助延卜申候刀鍛」治ニテ 後鳥羽院御宇ニ
年中番」鍛治ニ被為 仰付候處、先祖十二月之」御番ニ相当
リ御劔式振被為」仰付先祖之鍛治場へ無勿躰も御」幸被為
遊候、然共 天子之御事ニ御座候得者、四方新敷築地つき
不申」候ハねハ、不被為成 御幸候由、築地」つき申候得者、

甚寒氣之時分俄ニ」拵申候茂、早速調不申候ニ付、無是非
才覚を以、芝ヲたたみ築地ニつき申候、「然所」後鳥羽院被
為成御幸、先以築「地之作意ヲ御褒美、其上ニテ鍛」治場江
御入成被為 遊、御劔奉作「候を御覽被為 遊候所ニ先祖仕
合能」御劔無頼ニ出来仕候故、弥甚以「御詠覽ニ相叶、則其
時分為御褒美」築地之作意ニテ、則芝築地と名字ニ」被為
下、難有頂戴仕候、然共人々「芝築地と言ヲ廻シ不申、芝
辻ト申候、「先祖細工之類ヲ以、上々様方之御前へも」被為
召出候所、上々様方ニも芝辻と「被為 御召遊候故、中比ら
おのつからニ」芝辻ト罷成申候、私四代以前之曾祖「父於和
国ニ鉄炮張初之根本ニテ御」座候、其上祖父代ニ本口壹尺三
寸未」口壹尺壹寸、長サ壹丈、玉目壹貫五百目ノ」大筒 権
現様御上意を以、張」立差上ケ申候、其時代 御上意ニ而
異國迄渡り唐銅鑄筒ニ而ハ、右」玉目程之筒御座候得共、鉄
ニテ張筒」右玉目程成大筒世間ニ曾無御」座候、 権現様御
上意ニテ日本」國中之■鍛冶悉御諭議被為」仰付候得とも、
御請申上ル者無御」座候、然所ニ私祖父心易御請負申」上
□、右大筒張立差上ケ申候、是和」國大筒之張初二テ御さ
候、其後此御筒」紀州大納言様へ御讓被為進、于今」紀州様
ニ御座候、其外大坂御陳急成」砌、難調御奉公数々仕上申
候ニ付、其後」祖父ヲ被為 御召出、御褒美其上」品々難有
御上意ニテ末々弥御奉公相」勤申候様ニと被為 仰付候、子

孫私義ニ」御さ候故、于今至 御代々御目見仕来候、「御暇
被為下候其時分、御老中様被遊」御出、自然ニハ 御上意迄
も御座候、「御月番之御老中様御手る黄金」拝領頂戴仕候
御事

堺

芝辻理右衛門

延宝七己未年七月日

2 芝辻理右衛門由緒書上

天和四(一六八四)年一月

覚

權現様・台徳院様江乍恐私祖父御目見仕、御用」相勤候儀者細工能仕候ニ付大坂御陣其以前より」御祖父成瀬隼人正殿御執持、度々祖父被為 御召出、「御細工被為 仰付候所、其上別而 御上意ニ相叶候故ニ」御座候御事、

一七十六年以前慶長十四年酉ノ年 権現様御上意ニ而「鍛治悉御僕儀之上、鉄ニ而玉目壱貫目余之大筒」被為 遊度旨、被為 仰出候得共、御請申上候鍛治」無御座候所、私祖父御請負申上、本口壱尺三寸、「末口壱尺壱寸、長サ壱丈、玉目壱貫五百目玉之」大筒、慶長十六年亥ノ三月ニ張立差上申候、其後」此御筒紀弔 大納言様江御譲被為 進、于今至り「紀州様ニ御座候、尤其時代異國ら渡唐鑄筒、「右玉目程成大筒御座候得共、鉄ニ而其時分」右玉目程之大筒ハ曾無御座候御事、

一大坂籠城前秀頼様ら拾匁玉之鉄炮五百挺」被仰付候、其上又 権現様三匁五分玉之御鉄炮「五百挺六匁玉御鉄炮五百挺被為 仰付、隨分」急ニ出来候様ニと被為 仰付、成程急ニ出来」差上申候所、早速御陣之御用ニ立申候御事、

一七十一年以前寅ノ年、大坂御陳^{ミタケ}之砌、権現様・台徳院様^{ミタケ}大坂表江御出馬被為 遊候ニ付、御陣所江私祖父數度」御

見廻申上、御目見江仕候時分、数多之御鉄炮少宛之」滯直
シ御用ニ立申候御事、

一同時節、大坂御陣中ニ大筒玉数御打尽シ被為 遊候」時分、
数々之玉度々時ヲ切被為 仰付候、或者玉数「五拾と被為
仰付候時者六七拾、又者七拾と御座候時者八九拾、百斗
鑄調、時ヲ不越昼夜ニ不限相調、「早々差上御用ニ立申候
御事、

一御陣中ニ車掛り之御仕寄大たて被為 仰付候所、「無滯相
調差上ケ、御用ニ立申候御事、

一同年十一月廿三日大坂御陣之砌、 権現様為御上意、「御
祖父成瀬隼人正殿御承ニ而、人之ひたいニ御あて」被為成候
御用之由ニ而、丸之内ニ秀頼と御座候文字、「又丸之内二十
文字焼かね武ツ、鉄ニ而急ニ調差上候」様ニと被為 仰付候
所、早速出来差上申候、則「御料紙帳合別紙ニ認差上ケ申
候御事、

一大坂籠城之中、秀頼様ら大坂・堺町中不残、在々所々迄
武具・馬具、別而ハ大玉之鉄炮、大坂江差上ケ候者ニハ「金銀
ハ不及申、知行ニ而も其者之望次第無相違」可被下之旨、若
隱置脇る於相聞者、其者之儀ハ「勿論諸親類末類等迄、急
度御たやし可有との」触度々廻り、其上大野道(大野)見堺江罷越、
祖父宅江強儀ニ押込罷在、堺之町中武具・馬具僉儀仕居
申候而、「町中家々屋さがし仕悉押取申候、僉儀中」私祖父

を大坂城中江籠候様ニと申候所、如何ニも「相心得候、併御
城中江私籠候者、手前ニ有合候」鐵炮共船ニ而指參仕差上
可申候、則當浦ニ「十五端帆船調、鐵炮共積つなき置申候
故、」自然下々之衆中無御存知、私船ニも御手を「被付候儀
も可有御座候、如何可仕候哉と」偽謀候得者、尤之儀左候
ハ、是ヲ立置、大坂ヘ「越候様ニと道見馬印羽黒之吹貫を」祖
父ニ渡候ニ付、則船中ニ立置、折ヲ窺罷在候」中、大坂ら秀
頼様之為御使槐木五左衛門と「申仁堺江参、道見ニ逢、祖
父早々大坂江指越、「堺町中焼払候様ニと申渡候、五左衛
門ハ大坂江」帰候、道見祖父謀事とハ不存実と心得、「大坂
江早々籠城候得、其方越次第跡ハ町中」不殘燒払候と申候
ニ付、道見手前ヲ謀出申候、「大坂江鐵炮壹挺ニ而も不相渡
候得者御奉公と」奉存、右用意之船江所持之鐵炮共積乗、
淡路ノ由良江立退申候、其節謀取候羽黒之吹貫「持退候、
其節何之心も無御座、船中ニ而」燒捨申候御事、

一權現様大坂御勝陳、夫る京都二条御城江御成「被為遊、
国々御大名中様、御旗本中様、大坂表御勵」御僕儀被為遊
候砌、私祖父儀をも隼人正殿江「御尋被為成候、御上意
相叶、無冥加仕合有之間、「早々罷出候得、何とて延引仕
候哉と隼人正殿ら」預御使、二条御城江漸致伺公御目見江
仕候得者、「御直ニ難有、御上意下り、何角御尋被為遊候
ニ付、「御陳中道見無躰ニ祖父宅江押込、何角仕候旨種々」

謀立退候首尾共、其節之様子委細申上候得者、「御陳之砌祖父仕上ヶ申候御奉公之品々、別而御褒美」御知行をも可被為「下置様ニ被為思召候得共、御勝」陣以後間無之、品々御取込之上ニ有間、重而可被為」仰付 御上意難有次第二而、御前すさり申候御事、

右私祖父大坂御陳中ニ大筒之玉度々御仕寄、大たて「其外仕上ヶ申候御奉公、 権現様御直ニ其度々私」祖父江御上意被為遊候、隨分情ヲ出シ御用相勤候ハ、御勝陳之以後御知行可被為「下置之旨、數度」御上意下り候由、親私ニ兼テ申聞せ候、然共余り結構成「御上意、私祖父躰之者無冥加仕合故、只今ニ至」難申上ヶ奉存候得共、御尋之上殊ニ書付ヲ以「申上候様ニと被為仰付候ニ付、乍恐書付差上」申候、以上、

堺御鉄砲鍛冶

天和四甲子年二月日 芝辻理右衛門

3 由緒書

年月日未詳

抑吾朝鐵炮ノ濫

觴ヲ原ヌルニ人皇

百六代後奈良ノ

御寓種島ヨリ造リ

出セリト云々、此島往

昔南_一蛮_二附_一屬セル

ニヤ、島ノ館主小城

正成ト云者、享祿

戊子ノ年、彼ノ國ニ入

貢セリ、國王ヨロコヒ

阿瑠賀放至ト號

ケル鉄炮一挺并_ニ

此道ニ工ナル屏太餓

ト云人ヲ相添^ヘ賜ヒケ

レハ、正成イソキ同船

シテ帰リヌ、其ノ比紀

州那賀郡小倉ノ住

人津田監物筭長

渡_一唐_ノ志アリ、其ノ舟

風_一浪_ノ難_ニ遇テ種

島ニ流レヨレリ、正成

相一面シテ事ヲ問フニ

然々ト答フ、越正成

一女鶯宿梅ヲ以テ

妻レ之ニ、此ニ居シメ、又力

ノ屏太颶ヲ師トシ

テ、日夜擊丸ノ術

ヲ伝シニ、悉其ノ妙機

ヲ極ム、既三十餘霜ヲ

経テ、妻ハ早逝ス、筭

長モ則チ帰郷セシム

ヲ告ケヌ、正成無クレ力

シテ、阿瑠賀放至

ト屏太颶トヲ饑シ

本ノ国ニカヘラシム、天文

十三年泉州界府

ノ治工芝辻清右

衛門根来寺阪本

ニ寓居セリトキ、

召シレ之ヲ其ノ器具ヲ造ラ

ンノヲ求ム、清右衛

門モトヨリ鍛錬ノ

功、長セシユヘ逐一能ク

ソクリナセリ、筭長

コレヲ用テ世ニ名

手ノ誉ヲ流フ、筭

長ニ子アリ、一ヲ

筭正トイヒ、一ヲ自

由齋トイフ、今ヤ末

流区々ワカレタリト

イヘトモ、本伝ノ家

系不ルレ如カレ之ニ爾

或説云後柏原院

文亀年中蛮国ヨリ

一トトイフ者鉄炮

ヲ携ヘ種島ニイタ

リ、其来一由ヲ語テ曰ク

曩吾邦初一養一山ニ

勝一鬼アリ、多ク世ノ

患ヲナス、不スレ知ラレ所一以ヲ

レ攻ルレ之ヲ、一一日天一神來リ

告ヌ、亡レ彼レヲハタヽ、

鉄炮ニアルノミ、製レ之ヲ

之法、鉄ヲ以テ火ヲ

包ミ銀一丸ヲ躍シメ

テ擊レ之ヲ、若ニ其ノ言ノニ

シテ、終ニ勝一鬼ヲ殺

シツ、ソレヨリ以來用

レ之ヲトナン、於テレ是三島主
某氏能ク聞テ其ノ道ヲ広ム

其ノ伝一トカヤ、凡天文

之比ヨリ、諸国ニ遍

満セリ、而シテ世ニ種島

ヨリ肇ルトイフ者

八是也

4 由緒書

年月日未詳

抑於二日本一鉄炮ノ濫觴者昔季享祿元季戊子種嶋

有レ属南蛮、因茲屋形小城

正成順風拳レ帆、參内二南蛮

之國王エ一帝収覽不レ斜、賜二種々

宝物ヲ一、有レ二丁種ノ引出物一、其内云二

阿瑠賀放至ト一、有鉄一炮壺一挺正成

不知其様子ヲ奏一聞レ此由ヲ、又云二

屏太郎ト一、相添二上手ノ師匠ヲ一給
者也、正成同船而帰嶋云々、

然處紀州那賀郡小倉之住

侶津田監物筭長者、有テ二渡

唐之志一中流而逢二逆浪之難

覆一數十艘之類船拋二數万貫

之財宝ヲ一而着岸レ種嶋、正成聞

此一儀対一面レ筭長ニ問ニ彼先蹤ヲ一筭

長答レ本一國由來ノ為ニ留レ此人給二

姫女鷺宿梅ヲ一、為夫婦在住レ此嶋二

師屏太郎鉄炮之稽古無レ怠

目機銖両得レ其秘ヲ極妙伝也、

既経年月十年、加レ之有レ二子
何幸鸞宿梅短命而死了、則

監物申レ坂国之由正成不及レ力
彼阿瑠賀放至相添、屏太良

并色々宝物給了、天文十三年

帰レ住レ紀州也、于レ爰堺之住人云レ

芝辻清右衛門ト鍛冶在根来寺

坂本筭長呼レ之見レ之、鍛冶種々

巧意揃レ道レ具、昼夜鍛鍊而

以代々為名人者也、然筭長兩

人之子一人者云筭正、一人者云

自由斎也、今分^テ雖レ流布諸方

恐者根本豈不如レ此流矣

△南蛮屏太郎

津田監物筭長

津田監物筭正

自由斎

津田監物重長

杉江權左衛門

慶長第十五庚曆

八月吉辰 重政

狩野八太夫殿

江参

享祿元年戊子歳ヨリ慶長十五

庚歳迄凡八拾三年也

天文十三年癸卯ヨリ慶長十五

庚歲迄凡六拾八年也

9 願書留

明和元(一七六四)年六月

(表紙)

「明和元年申六月

願書留

芝辻理右衛門」

一私儀四拾九年以前正徳六申年六月十九日「晃禪院様御代
被為 召出、御切米六拾石御扶持方」拾人分被下置家督相
続仕、御奉公相勤來難有「奉存候、尤御役御鉄炮指上度々
御目見ニ罷下り候、「然処近年病身ニ相成、別而当春る病
氣指発り」難儀至極仕候故、何卒御憐愍之上、引退申度奉
存候、「悴清吉義式十二年以前、寛保ニ亥年召連罷下り」
新規 御目見被為 仰付、難有奉存候、夫ら度々」御目見仕
來り候、恐多御願ニ御座候得共、私儀引退」被為 仰付、悴
清吉義被為 召出、家督相続」被為 仰付被下候ハヽ、難有
仕合ニ可奉存候、依之御願」申上候間、何卒右之趣被為
仰付被下置候様、奉願」上候、已上

芝辻理右衛門

明和元年申六月

斎利

四宮元右衛門殿

天野一郎兵衛殿

海部七兵衛殿

直紙豎物

覺

一曾祖父

芝辻理右衛門

元和元卯年御切米七拾石御扶持方拾人分被下置「御鉄炮
張二被 召出九ヶ年相勤、奉願隱居

一曾父(祖)

芝辻理右衛門

元和九亥年父跡職被 仰付、御切米御扶持方無「相違被下
置、四十八年相勤、奉願隱居

一父

芝辻理右衛門

寛文十亥年父跡職被仰付、御切米御扶持方「無相違被下置、
三十九年相勤、病死仕候

一兄

芝辻助之進

父理右衛門病死二付、跡職奉願、被 仰渡無御座「以前病死
仕候

一姉婿

芝辻猪右衛門

後理右衛門二改

芝辻助之進病死二付、悴無御座、幼少之弟清吉」と申者御座
候得者、至而幼少二付、右猪右衛門江御切米「四拾石御持方
拾人分被下置、御鉄炮御用清吉」儀成人仕候迄被 仰付、宝
永六丑年七八ヶ年相勤、「奉願引替り申候

右之通り代々結構ニ被仰付、相続仕来り申候、以上

堺御鉄炮師

明和元年申六月

芝辻理右衛門

右之先祖書ト由緒書ト半紙帳へ相認、願書ニ指添御鉄炮奉行衆ヘ芝辻伝左衛門持参指出ス

乍憚御願申上候

一私義四十九年以前正徳六申年六月十九日「晃禪院様御代
被為 召出、御切米六拾石御扶持方」拾人分被為 下置、家
督相続仕、御奉公相勤來、「尾州御用之儀者代職芝辻伝左
衛門と申者差置」御用等尾州表御鉄炮張同様ニ被為 仰付、
重々「難有仕合奉存候、然ル処私儀近年病身ニ相成、」当春
る別而病氣差發申候、悴清吉義二十二年以前、寛保三亥
年召連罷下り新規「御目見被為 仰付、夫る追々御目見ニ
罷下申候、私義」及老衰ニ、其上病氣指發申候ニ付、何卒引
退キ「被仰付、悴清吉義被為 召出、家督相続被為」仰付
被下置候様、去月下旬表御鉄炮奉行衆ヘ「願書指上ケ申候、
往古ル 御家之儀ハ御代々」御憐愍被成下候私家ニ御座候
ニ付、此節御願申上候、「何卒願之通り被為 仰付被下置候
様、奉願上候間、「右之通り隼人正様御前宣様被仰上被下
候様ニ」各様迄御願申上候、以上

明和元年申七月

分部伝八殿

芝辻理右衛門

内藤茂左衛門殿

宮原善兵衛殿

吉田庄兵衛殿

村木佐五兵衛殿

河野九左衛門殿

深津善次左衛門殿

右之通直紙豎二相認、伝左衛門持參差出ス

右本文之通書付指出申候処、九月廿六日願之通「被為仰付、清吉呼ニ参り、十月十一日御用所ニ而、奉行衆」御立合ニ而被仰渡、則御書付御渡被下候

10 芝辻理右衛門口上書

正徳六(一七一六)年三月

(端裏書)「隼人正殿江差上ヶ申候下書」

乍恐口上書ヲ以申上候

一慶長年中摂州大坂御陣前」源敬公為 御用、玉目百目、長八尺之御鉄炮、「御先祖 宗心様ら四代已前之理右衛門二被」仰付出来御座候内、御陣初り、武道具何ニ「不寄差上候者ニは、過分之御褒美可被下候、「若隱置候ハ、其者之儀ハ不申及、末類まで」御たやし可成との大坂ら御触度々廻り候ニ付、「親類とも集り、右之御鉄炮是非共大坂江」差上候様ニ、左候ハ、可為吉事と様々異見仕候」得共、先祖聞入不申、縱此義相顯如何様之」御仕置ニ罷成候共、義之守事中く難」替候間、何茂因果と存候へと申切、大坂江相渡」不申候内、大坂表 源敬公 御出馬被為」遊候、則先祖御目見ニ罷出候処、宗心様」御意被成候者、兼而申付置候鉄炮定而」大坂へ渡可申与御尋被遊候故、右之段々申上、「御鉄炮指上申候得共、殊之外御感心被遊、「則 宗心様御心得と御座候而御切米七拾石、「御扶持方拾人分被 下置、其節急成御用」とも御陣所へ數度被仰付、仕立差上申候、「即其度々從 宗心様御直ニ被 仰下候」御書并御注文等、于今所持仕罷在候、「右御鉄炮其節早速御用ニ立申候、右」之

謂ヲ以九年已前相果申候理右衛門迄、数代」御切米御扶持方被下置、難有頂戴仕候、「右理右衛門子之年相果申候時分、悴清吉」義御願申上候処、八年以前丑之年私被召出、御切米四拾石御扶持方拾人分被下置候、「先理右衛門致病死、悴清吉幼少二而指当り」候家職難相勤候ニ付、清吉成人仕候以後御吟味之上、如何様共可被仰付候へ共、一先私」理右衛門罷成家致相続候様ニと御書付ヲ以「被仰渡、難有仕合ニ奉存候、其後清吉」成人仕候間、召連罷下り円覺院公御代、兩度迄一所ニ御目見ヘ」仕候、其節私義御役義御赦免被遊、「清吉ニ被仰付被下候様ニと御願申上度旨、」御役所へ御内談申上候処、私被召出」間茂無之間、先々相勤候上、御沙汰被成「可被下由、任御差団差控罷在候、其以後」御願申上度奉存候へ共、押而申上候義憚多」奉存延引仕候、清吉儀当年廿一才ニ罷成候」ゆへ、上方公用之義も去ル比る相勤させ」申候、私ニ被下置候御切米御扶持方被召上、乍恐清吉義被召出、先理右衛門通りニ被為仰付被下候様ニ奉願上候義、尤此度」御役所へも右願書指出候へ共、別而從」御家御取立之私共義ニ御座候故、各様」まで御願申上候、乍恐宜敷御取成ヲ以、「御耳ニ達候様ニ被仰上被下候ハ、可忝」存候、以上

正徳六年 堺御鉄炮鍛冶

申三月

芝辻理右衛門

印なし

馬場藤右衛門殿

飯田久左衛門殿

鈴木茂兵衛殿

水野弥三右衛門殿

正徳六(一七一六)年六月日

正徳六年甲ノ六月

尾張る御用之義在之」候間、兩人とも急参候様ニと「飛脚ニ而申越候ニ付、同月」十日堺ヲ罷立、晴天」輕尻馬式足猪右衛門・清吉」同道ニ而参候、向屋道中小遣帳別紙ニ在之候

一一日、晴天

一二日、同

一十三日、同尾州へ朝五ツ時ニ着、藤助其儘御支配衆江御届ケニ相廻リ申候

一十四日、休

一十五日、晴天、猪右衛門・清吉被召出」御月番大嶋与右衛門殿へ四人衆」御寄合候而、猪右衛門願之■儀」被為御聞届遊、願之通ニ被為」仰付候間、難有奉存候ヘと被仰」出、則 御奉書御読御聞」被成、其上ニ而清吉へ被仰渡候ハ、「今般江戸ニ而も其外大名衆ら」加増なんと、申てハ中々思ひもよらぬ事なれとも、其方義ハ」格別之者ニ思召候故、此度■結構ニ被仰付候、隨分と役目」大切ニ可相勤旨被仰渡候ニ付、「奉畏候由申上候、又々四人衆御申候ハ、「くれくもケ様之義いつかたニても「今程ハ無之候よし難有可存」と御申候、右被仰付候御本紙ハ」御用たんすニ納リ在之候、小川」郷左衛門殿御手跡ニ而御写被下、今ニ」有之候、其上ニ而奉

行衆被仰聞」候者、明日ハ御精進日ニ在之候間、「今日御老中其外役人中ヘ御礼ニ相廻り候へと、被仰渡奉得其意候」と御請申、郷左衛門殿被申候ハ、相廻り「申候ハ、加増トハ申間敷候、■■■」結構ニ被為 仰付、難有仕合ニ「奉存候由申候ヘと御心付候、是又」得其意同日ニ藤助召連廻申候」一十六日、瑞龍院殿御名日ニ而「何方へも出不申候、堺へ状出ス

一十七日、中備中悦ニ被参候

一十八日、明日 御城代衆為「御名代御逢被成候旨、差紙」三て支配衆ル申参候本帯」別ニ有之候

一十九日、朝五ツ時御月番大嶋」与右衛門殿へ向参

殿様ノ御名代として御礼御請」被成候ニ付、献上ハ五本入扇子ニ二重くりのだいのセ差上ケ申候」同日ニ清吉理右衛門と改名被仰付、「是も直ニ御礼ニ御門ら引かへし」上り申候、此時藤助ハ猪右衛門と申候義御聞ニ入候

一廿日、隼人正殿在江戸ニて候へとも、「御下屋敷并柳原へも参候

一廿一日、仲備中振舞申候、仲備らも祝義可給被給候

一廿二日、伝左衛門へ武人扶持増シ」遣候

一廿三日、休

一廿四日、同

一廿五日、与右衛門殿ニテ御役筒」之義被申渡候、御役筒今

年ハ「拾三挺差上ケ筈」但シ享保元甲十月、此年号七月ニ
改元六月可被召出候ニ付、月ノ割」合ゆヘ十三挺と極之候」

来年六月拾六挺ツ、差上ケ」之筈奉得其意候由申上」候

一同日、伝左衛門ら為祝義金百疋」扇子式本入給候

一廿六日、御暇乞之義、御願申上候、「勘太夫殿今日

ハ「圓覺院殿御名日候間、明日」御城代へ可罷出と御申被成
候

一廿七日、御暇乞之義、御聞届「勝手次第二罷帰候様ニ」と「朝
飯後申参候故、奉得其意」身拵いたし罷出、直ニ方々」暇乞
ニ廻り申候、其日二名古屋ヲ」罷立候

一廿八日、直ニ伊勢へ参候、理右衛門始「参宮七月五日ニ堺へ
帰着仕候、兩人共」無事大吉

12 芝辻理右衛門三代事績書

年月日未詳

(端裏書)

「控ニ認候様ニど^杉五郎左衛門殿被申候ニ付、相認留り」

覚

当芝辻理右衛門三代已前

理右衛門義

一拾弐年已前宝永五子ノ年七十二才ニ而相果申候」先祖代々御鉄炮鍛冶ニ而御用被為 仰付「度々御目見仕候、桜町拾壹町之年寄役往古る」兼帶仕来り候、町儀公事出入等ニ付、御番所江」罷出候節も脇指ヲ帶、御縁側惣年寄並ニ罷在候、此役義元禄八亥ノ年御断申上、差上ケ」申候、式日御礼之義ハ淡路守様御代天和四」子ノ年始而被仰付相勤申候

申候

当芝辻理右衛門二代已前助之丞

理右衛門義

一此理右衛門助之丞と申先理右衛門孫ニ而御座候

処ニ、「梓子分ニ仕右御断申上、宝永四亥ノ年四月廿八日ニ」甲斐守様江御目見江仕、其後式田御祝義相勤」■候、然ル所翌五年子ノ末用七申^ト先理「翌年六月理右衛門相果申候後、家督」相続仕候、若輩御座候故、御役義ハ」相勤不申候

へとも、先格之通御鍛治之「格を以、式日御礼等相勤、其外」
御番所江罷出候節も父理右衛門通ニ「仕候、同年相果申候」

当理右衛門義

一九年已前卯之年養子ニ參、「家相続仕候以上
右之通ニ御座候、以上 名なし

七月

あて所なし

17 御物鉄砲覚

覚

元和九年

御物御鉄炮 百挺

寛永元子年

同御鉄炮 千四百三拾挺

寛永五辰年

同御鉄炮 四百五拾挺

寛永六巳年

同御鉄炮 七百四拾五挺

寛永七午年

同御鉄炮 百三拾挺

寛永八未年

同御鉄炮 百弐拾挺

寛永九申年

同御鉄炮 八百弐拾挺

寛永拾酉年

同御鉄炮 百挺

寛永拾亥戌年

同御鉄炮 六百六拾八挺

寛永拾亥亥年

同御鉄炮 六百六拾八挺

(元禄二年～六八九年)閏正月一二日

同御鉄炮 七挺

寛永拾三子年

同御鉄炮 八百八拾弐挺

寛永拾六卯年

同御鉄炮 五百六拾三挺

寛永弐拾未年

同御鉄炮 四百六拾壹挺

寛永弐拾壹申年

同御鉄炮 六拾六挺

正保三戌年

同御鉄炮 五拾五挺

正保四亥年

同御鉄炮 貳百九拾五挺

承応弐巳年

同御鉄炮 九百拾五挺

承応三午年

同御鉄炮 三百挺

明暦元未年

同御鉄炮 百挺

明暦弐申年

同御鉄炮 百挺

明暦三酉年

同御鉄炮 弐千四百八拾弐挺

万治弐亥年

同御鉄炮 千弐百四百八拾弐挺

万治三子年

同御鉄炮 千百五拾四挺

寛文元丑年

同御鉄炮 千百三拾挺

寛文弐寅年

同御鉄炮 弐百九拾四挺

寛文三卯年

同御鉄炮 八拾五挺

寛文七未年

同御鉄炮 百九拾五挺

寛文八申年

同御鉄炮 四拾挺

寛文拾壹亥年

同御鉄炮 弐拾挺

寛文拾貳子年

同御鉄炮 百挺

延宝三卯年

同御鉄炮 百挺

延宝六午年

同御鉄炮

五拾挺

×

右者御物分貰書也

已

壬正月廿一日

18 尾張藩主御目見覚

宝暦六(一七五六)年七月一二七日

(端裏書)

「伝左衛門へ遣候扣也」

覚

(十九日)

一 晃禪院様御代正徳六申六月被為 召出^レ御切米六拾石御扶持方拾人分被下置候、殿様江戸ニ被為 遊御座候ニ付、為御名代両城代衆^レ御逢被成候

御城代

献上扇子五本入

渡邊新左衛門殿

二重くり台

成瀬修理殿

奉行衆月番

大嶋与右衛門殿

右被召出候年^レ年々 御目見ニ罷下り申候

十七年以前宝九迄

十五才

一 寛保三年亥十月十五日、惣子清吉召連罷下り、新規^レ御目

見被仰付候

献上

三匁五分玉

鉄炮壹挺 清吉

同

上銹鍋五枚 理右衛門

御披露御用人

津田兵部殿

御城代

大道寺玄蕃殿

同

千賀縫殿殿

奉行衆月番

一色甚右衛門殿

一延享貳年丑十月十五日、理右衛門・清吉両人罷下り「御目
見被為 仰付候

献上

上鑄鍋五枚 理右衛門

同 五枚 清吉

御披露御用人

横井伊織殿

御城代

大道寺玄蕃殿

奉行衆月番

笛岡源四郎殿

一延享五年辰二月十三日、理右衛門・清吉両人罷下り「御目
見被為 仰付候

献上

上鑄鍋五枚 理右衛門

兩草失五枚壹本 清吉

御披露御用人

星野八左衛門殿

御城代

大道寺玄蕃殿

野崎主殿殿

奉行衆月番

四宮元右衛門殿

寛延三年午二月廿三日、清吉壹人罷下り「御目見被為 仰付
候

獻上

上鑄鍋五枚 清吉

御披露御用人

はい原金左衛門殿

御城代

大道寺主水殿

同

野崎主殿殿

奉行衆月番

四宮元右衛門殿

宝曆弐年申二月廿二日、清吉壱人罷下り』御目見被為 仰付
候

献上

作り花壱本 清吉

御披露御用人

小笠原三郎右衛門殿

御城代

大道寺主水殿

野崎主殿殿

かゝ嶋七郎左衛門殿

奉行衆月番

三浦文之右衛門殿

宝曆四年戌二月廿二日、清吉壱人罷下り』御目見被為 仰付
候

献上

上鋤鍋五枚 清吉

御披露御用人

中條藤四郎殿

御城代

右三人

奉行衆月番

四宮元右衛門殿

宝暦六年子三月朔日、理右衛門・清吉両人罷下り」御目見被為仰付候

献上上鑄鍋五枚 理右衛門

白炭壺箱 清吉

御披露御用人

松井外記殿

御城代

右三人

奉行衆月番

海部七兵衛殿

右理右衛門被召出候而、当子年迄四拾壹年相勤申候、「悖子清吉新規 御目見ら今年迄拾四年ニ罷成候、」理右衛門正徳六申年被召出、夫る年々罷下り「御目見へ仕候帳面等、寛保三亥年、清吉新規御目見迄「廿七年之間理右衛門壺人罷下り候様、相見へ不申候、いろくと」致吟味候へ共、相知不申候、其元ニ扣御座候ハ、御改置キ可被下候

凡廿七年ノ間十二度斗と覺申候

一親理右衛門・兄理右衛門・猪右衛門年々罷下り御目見扣等ハ「相見へ不申候、是ハ古帳有之、拾四年以前清吉新規」御目見へ之節、右帳面ら見出し用ニ立候事も有之候ヘハ、「是非有之筈ニ候様、いろく致吟味候へ共、是又見へ不申候、」是又其元ニ有之候ハ、御吟味可被下候

一右二付、古書等無之候、由緒書之事ハ御指出し之帳面ニ「も
れ申事ハ無之候、右之通り外ハ無之候、以上

同 清吉

宝曆六年子七月廿七日

芝辻理右衛門

芝辻伝左衛門殿

同 小八郎殿

19 成瀬正成・米津親勝連署書状

(年未詳)六月六日

追而是ハ小吉申候、「三々五分玉之筒壹丁」ツ、
御下前「はり」候て可給候、以上
急度申遣候、「上様六匁之御筒」兩人ニ式丁ツ、はらせ「候へ由
被成 御誕候間、「よき鉄二て念を」入、張可申候、為其「申遣
候、恐々謹言

成小吉

正成(花押)

米清右

親勝(花押)

六月六日

芝辻理右衛門殿
並河源介殿

20 成瀬正成・米津親勝連署書状

(年未詳)六月一四日

以上

一書申候仍 將軍様「御鉄炮請取ニ奥山」茂左衛門殿御越候、
おけためもよく候由「承候、弥念を入」可申候、何事も「茂左
衛門殿次第二可」仕候、次ニ 御所様江「上候千丁之御筒之」
手形其方ニ無之由「不審ニ候、様子清三・」喜三へ可被申渡候、
恐々謹言

成小吉

六月廿四日

正成(花押)

米清右

親勝(花押)

芝辻理右衛門殿

21 喜多見勝忠書状

(元和九〔一六三三〕年)七月七日

芝辻長左衛門家文書

以上

一筆申越候、其「方なと他ハ大坂ニ而」御礼可然と存候而「稻
宮内殿談合」申候ヘハ、此方ニ而「次而も候ハ、能候ハんと」宮
内殿も被申候、「此以前ハ大坂ニ而」御礼被申候哉、左様「候
ハ、大坂ヘ参候之間、「如何可在候哉、何も」衆中次第二候、」
恐々謹言

北五郎左衛門

七月七日

勝(花押)

五人之かち衆

まいる

(元和九〔一六三〕年)七月八日

尚々此以前ら被致御目見候衆いつものことく不殘御同道可有之候、已上

態申入候、仍京町人衆「御礼之義沙汰不承候故、」不申入候處二、俄ニ極り昨「七日ニ何茂 御目見」被仕候、遠路ニ候ヘハ俄ニ各被參候儀も不罷成候」間、其元ら被申越候通、「井上主計頭殿へ得其意」候ヘハ、大坂へ被為成候を其方ニ待被致「御目見候ヘハ如何候条、早々被罷登御次而」次第「御目見可然旨」被仰候条、急と御越「可有之候、委細者」北見五郎左衛門殿ら「可被仰遣候、將亦」理右煩之通も主計殿へ「御物語申上候、恐々謹言

稻宮内少

(草名・花押)

七月八日

芝辻理右衛門様

榎並屋九兵衛様

榎並屋忠兵衛様

芝辻長左衛門様

榎並屋勘左衛門様

まいる

(年未詳)極月一七日

尚以御鉄炮「五百挺いかた五拾」如御書付之請取、「御鉄炮奉行衆へ」相渡し申候、可御心安候、「委細者稻富宮内殿」ろ可被仰入候間、「不能具候、只今者」將監申候謹之鉄炮「參着仕忝存候、」以上

御状忝存候、然者「從 中納言様」被 仰付候、御鉄炮「五百挺出来御下候、」一段と 御念「入候」間、可御心安候、代銀之「儀何も相渡し候」間、其御心得可有候、「稻富宮内殿不」大形被入御精候、「可被成其御心得候、」次ニ為御音信沈香「五両宛送給候、」忝存候、何も面上ニ「可申述候、恐々謹言

大久保将監

忠良(花押)

極月十七日 天野伝左衛門

清宗(花押)

芝辻理右衛門殿

榎並九兵衛殿

榎並勘七殿

芝辻長左衛門殿

芝辻長左衛門殿

24 喜多見勝忠書状

(寛永三〔一六二六〕年)閏四月七日

以上

書中披見申候御」鉄炮京ニ而いたし」候ハヽ、手間入可申候間、
同者此方へ御下候へと」周防殿へ可申遣候間、「京への飛脚のも
□「明日早天ニ可越□□」上ニも越候へと申来候□□、「右之者
とも可上遣候、「恐々謹言

(候其)

(ハヽ)

五郎左衛門

閏卯月七日

勝(花押)

芝辻理右衛門殿

榎並や勘左衛門殿

25 板倉重宗書状

(寛永三[一六二六]年)閏四月一〇日

芝辻長左衛門家文書

猶々、御鉄炮角」などとも氣を□「見分よきやうニ」「こしらへ可被申候、「作料之所ハ五郎左衛門殿」次第二可申付候、「以上、

御鉄炮大小九拾」丁指下候間、兩人之者目録次第二「悪所をなおし」「其元ニテ糺明」被申当ともなおし「越可被申候、察」之御鉄炮ニテ「御座候、少在之事ニ而、」別而念入申度候「近日御上洛」御座候間「上様可被成御覽候間、「其心得可被申候、」恐々謹言

板周防守

閏卯月廿日 重宗(花押)

芝辻理右衛門殿

榎並屋勘左衛門殿

同九兵衛殿

同忠兵□殿

芝辻長左衛門殿

(寛永四〔一六二七〕年カ)一〇月六日

尚々石河八左衛門殿舟ハ「たゞいま作り申候間、来月」末時分
ニ出来可申由ニ候」条、其内ニハ鐵炮之色かたまり「候ハんとま
んそく申候、不及申候へとも、「てツほうあふらかミわらにて」
よくく御つゝミ、一はニ二十丁ツ、」御入、かすはかり能々
あらため、御渡」可有候、大坂へ細々人御越候て、其元」てツ
ほう之様子民部殿又ハ茂兵ヘニ「可被仰候、將又主計殿・信濃
殿」鉄炮代銀此度御渡候ハんすれ共、「少も無御手違銀渡候、
かたへの御状」御書候事不罷成候間、右之鉄炮」ニ所へ御渡て
かたをとり、たしか成」もの江戸へ御下し可有候、「代銀うけ
取の分返可申候、一はい薬ニテ」御ためし候との状北見五郎
左衛門殿ら「御取候て、是も銀取ニ参候ものに」御かへし可有
候、くれく右之鉄炮「可成ほと被入御念、てツほう・たい」
かな物以下までよき様ニ御はり候て御下し可有候、是ハ五人
の御ため、「又ハ我等ためニ候条、返々も被入」御念可給候、
信濃殿てツほうも「ちとおそく候共、民部殿へ能々」断被仰、
色かたまり候てニ御渡可」然候、鉄炮出来候者ハ、民部殿内
衆へ「御見セ可有候、以上

追而石川六左衛門殿と申人ハ、石川八左衛門殿弟ニテ候故、
状かへし被申候、以上

今度御上洛中切々申承大慶存候

一井上主計殿御番筒「百挺陸通御取可」被成と被仰候へ共、
能船「便立ニ付而、船ニ而御取」候之間、鉄炮出来次第「大
坂難波橋之西」船大工町ニテ、「上様御舟頭石川八左衛門
殿」内衆猪瀬茂兵衛と「御尋候而、此状御年寄衆」る之御手
形鉄炮と「一度ニ御渡、鉄炮御請」取候とのてかたを御取
可有之候事

一永井信濃殿番筒百「五拾挺大坂ニ而小浜民部殿へ」御渡、手
形御取可有候、「則我等方ら状越申候」御年寄衆御手形ハ、
京ニ而信濃殿る民部殿へ「御渡候、何茂右之鉄炮」十一月十
五日ニ御渡候はず致約束候条、其御心得「御急可有候、乍
去舟ニ而」参候鉄炮共色付立を「つゝミ御渡候者、ことく
くくさり可申候間、能々御」ぬくい入御渡可然候、恐々「謹
言

十月六日

稻宮内少

(草名・花押)

芝辻理右衛門様

榎並屋九兵衛様

榎並屋勘七様

芝辻長左様

榎並屋勘左様

(寛永四〔一六一七〕年)一一月一九日

尚々両「上様御持筒被入御念を」くろかねのきたい内上なミ
なりかつかうあたりつよミ可成程念を入れられ御下し可有
之候、先度も「申入候ことく」相國様御持筒ハ何もいかにも
かるく「ほそく御はり可有之、中にも三尺三寸」かるくかつ
かうよく御はり上可有之候、「くれぐれあたり可被入御念
候、次ニ九兵を」たのミあつらへ申候、家具此此ものニ御下し
忝存候、路次中無何事参着申候「間可御心安候、先可申を
駿河」大納言様御番筒色々才覚いたし「水野河内守殿御た
めし被成候はずニ相極」申候間可有其御心得候、是も河内
殿「御登次第御ためし候て御改出来候ハ、」可被仰越候、
今切 御手形取候て可進之候、以上

十月十九日之御状十一月四日参急令被見候事、

一相國様被 仰付候五百「挺之御番筒大岡伝左衛門殿」・太田
次郎左衛門殿御改出来之由、「御紙面之通御年寄衆へ」具ニ
申上御伝馬 御「朱印今切御手形取候て」水野河内守殿へ相
渡し申候「五三日中爰元御立御」登被成候間、御鉄炮共御
拵「置年内ニ御下可有之候、「此者ニ可進候へ共大事之」御
手形候故、壱人宛登候」ものに遣候儀如何と存候「処ニ、折
節之河内守殿御登候故、則言伝遣候、「此以前のことく

御朱印ハ「板倉周防守殿より出申候」則從御年寄衆御状被遣
候、万事水野河内守殿へ「被得御意、御指図次第ニ」被致尤
存候事

一御報之様子河内守殿る「此方御年寄衆并我等方へ」具ニ被
仰御状御報候様ニ「可然存候、河内殿ハ御代官不」被成候故、
代銀之儀者無御「存知由被仰候間、別ニ状御」趣御鉄炮と
一度被下「可有候事

一大岡伝左衛門殿・太田次郎左衛門殿「る此方御年寄衆へ御
鉄炮」御ためし定との御返状之趣ニ「是又御鉄炮と一度ニ
被下可有候事

一たいかな物忠右衛門・七右衛門様極印「打被申候由尤候、
恐々謹言

稻富宮内

十一月十九日
(草名・花押)

榎並屋勘左衛門殿
榎並屋九兵衛殿
榎並屋勘七殿
芝辻七左衛門殿
芝辻理右衛門殿

(寛永四〔一六二七〕年)一一月二三日

尚々御鉄炮代銀之義、重而若狭守殿の拙者方へ御状參候様
ニ可有御才覚候、其状主計殿・信濃殿懸御目ニ相濟候様ニ可
致才覚候、但それニ不及北見若狭守殿の御渡可被成候哉、
重而御左右次第候、以上

追而此状紀州小谷久左衛門殿□御届可有之候、以上

御状披見申候、仍去年被仰付候御持筒拾五挺出来、板周防
守殿御朱印ニテ北若狭守殿の御下候ニ付て甚蔵相副差下被申
候、路次中無異儀参「」、則井主計頭殿・永信濃「」御披露
被成、何も御意二入候間、可御心安候、致糺明相替義も候
ハ、重而可申入候、將亦此状板倉周防守殿・北若狭守殿へ御
届可給候、次ニ拙者儀仕合能当十九日ニ御知行御加増如何と
も能所ニ而式百石拝領仕、忝仕合満足可有御推量候、隨而為
御音信染付角皿廿、染漬鉢式ツ送給忝存候、猶追而可申達
候、恐々謹言

稻富宮内少

十一月廿二日

(草名・花押)

芝辻理右様

榎並屋九兵様

榎並屋勘左様

芝辻長左様

御報

辰(寛永五[一六一八])年極月一五日

猶々亥年被仰付候「五百挺之御番筒殊外疎相ニテ」大かた
さけ損し申候故、五人之「御鉄炮はり共、上様御為と不
存知」御てつほうあしく致候間、ハやうニ候てハ「何の御役ニ
も立不申候条、以来中々」御目見をも御させ被成ましきと
被仰候、此度の御鉄炮も被仰付間敷ニ「相極候へ共、我等
色々さいく仕、御詫言」致候へハ、拙者ひふきをも仕候之様
被仰」御しかり候へとも、この五人之かぢハ「一夢」病氣ニ御座
候駄ニ右相國様 当御所様へも「一夢」才覚を以御目見為致
たし由候て「万事相違申儀無御座、亥ノ年之」御番筒疎相ニ
仕候ちかい返ニ御座候条、「ひらたく御免被成、前々のこと
く被」仰付被下候へと、精々様々御わひこと「仕相済候条、
其もやニて以來之処」被入念御鉄炮共よき様ニ御たしなミ
可有之、この度之義、大かたニ「被存知以来、万事御鉄炮あ
しく」被致候ハ、かさねての義ハもはや我等も「きもいり申事
執申ましく候条、其もや」可有之候へと、きやうニ候へとも
今度我等めい「わく致候事、筆壼ニ「つくしかたき」ゆへ如此候、
一夢か御ためと存計ニ「一かとせいを入相すまし申候条、そ
の」御心得可有候、この度之御せんさく」大かたの事ニテハ御
座なく候、五百挺之内」青山大蔵少殿御同心へ百挺渡り申

之内、「廿九挺此度新四郎ニあしき所仕直させ」申候。残四五挺之内ニ何ほどあしき「御筒御座候共、以来ことくく百挺之内ニ何ほどあしき」はりかへさせ可申と御約束仕、今度□「」相濟申候、その御心得可有之、あしき御筒之「分ハかさねておのくへ相濟可申候、「万事五人者物こと不念候故、我等に」までへ苦勞御かけたりとてハ五人之者へ「御ニくしミ数々ニ候、かやうニ御不念ニ候てハ」五人の御ためあしく候ハん間、その御ニニ「可有候、此ふミ五人よりあい五度も十度も」御よミ候て御らんあるべく候、次ニ「此度之御てつほうのわり之義ハ亥年」のことく、井上主計殿・永井信濃殿る「五人へ被遣候御書立のことくニ被致」可然存候、水野河内殿へも右之かきたて

(以下第二紙)

御目ニ御かけ可有候、御判ハ有間敷候へ共、「御右筆衆之手にてまきれ無之候、「その御心得可有候、其時分御両所様」被仰様ニも御判被成可被遣候へとも「五郎左衛門殿へ之御そへ状ニ御判被成、また」此わりニも御判被成候へ、いや手かたの様ニ「候之間、御右筆衆之手をしるしと」被仰候間、その御心得可有候、此通河内殿ニも「申入候、その御心得可有候、以上

御状具令被見候事

一勘左衛門被罷登之時分、從「相國様被仰付候五百挺之」御番筒之儀付而、色々「六ヶ敷儀共候て、新四郎久々」逗留被致候、亥年被仰付候「五百挺之御番筒御足輕」衆へ御渡被

(鉄炮)

成候處ニ殊外「鉄炮疎相ニ而敷々□□」惡敷ねちなどずらくと「ひとりぬけ候も有之候」又ハ火さらまわり筒之内二あなたといくつもあき候も「御入候、其迄だいかな物以下」まで殊外惡敷わきニテ「銀三十匁つゝニテはり候」鉄炮壇壹枚つゝの御番筒」そさうニ候間、此度之御筒五人へ御はらせなく余人ニ「可被仰付旨御年寄衆」被仰候得共、各如御存知之「色々御託言仕以来者」一かと念を入させ可申候、「重而少も惡敷御座候ハ、」一挺も被仰付候義御無用ニ「御座候由、脇をかたく御約束」仕、此度ハ如先年御添状「御ためしの御状取候て越申候間」可成程、被入念旨御張上「尤存候、此度五百挺被仰付候」御鉄炮少も惡敷所候ハ、「已來ハ御鉄炮

(も)

はり被申候儀も「又ハ両 上様御目見□」「罷成間敷候条、必其御心」得可有之候、為御届之如「此具ニ申入候、水野河内殿へ之」御副状ニも此以前之御鉄炮「惡敷通被仰遣候、大岡」伝左衛門殿・太田太郎左衛門殿へも此以前之御鉄炮之御改共、「不念ニテ疎相ニ候間、此度之」御鉄炮つよミたいかな物「以下返々入御念御請取」候て御改之様子相究」次第旁々御左右被仰候へと

(以下第二紙)

御年寄衆ら被仰遣候わき」くニテ三十目ツゝの番筒」ら悪
敷由被仰遣候間、其」御心得可有候、不及申候へとも、「各過
分ニ損参候共、御持筒」同意ニ被入御念候ハヽ、おのゝく」已
来も「上様御鉄炮」はり候て、御ためよく可有候、「少も悪敷
事候ハヽ、以来」御細工も被 仰付間敷候、「御目見も中々罷
成間」敷候間、返々大事之儀候条」其御心得可有候、右五百
挺之」御鉄炮のためしたいかな物以下迄」ことく相済候
ハヽ、大岡」伝左衛門殿・太田次郎左衛門殿ら」今度之御返事
御年寄衆へ」具ニ被仰越候様ニ被申、其御」年寄衆へ之御返状
もたせ御」越可有候、その上ニテ今切御手形取候て可進候事
一駿河 大納言様去年御鉄炮」右之御注文ら少なそ目ニ「く
ろかね目ほとかろくと御好」被成候間、則注文進候、此分ニ
御仕立、此外之所々ハ右御」注文のことくに鉄炮台金物」已
下迄被入御念難有候、「則はかね御筒拾挺分今切」御手形
取候て、此新四郎ニ越申候

一去年はり上被申候、「相國様御持筒拾五挺之」代銀合壹貫
目請取、新四郎ニ相渡為登申候間、たしかニ御請取」重而
相届之儀可被仰越候事

一いた三十膳早々御出し御越」可有候、具ニ注文別弔ニ書付」
進候様子具ニ新四郎ニ申渡候事

一御年寄衆ら水野河内守殿へ之」御状并我等ら之状たしか御

届」可有候事

一御年寄衆ら大岡伝左衛門殿・太田二郎左衛門殿へ之御状
并我等ら之狀、「是又慥ニ御届可有候事

一あかかねかわらの義、委新四郎可被申候、「恐惶謹言

辰 稲宮内少

極月十六日

(草名・花押)

芝辻理右衛門殿

榎並屋九兵衛殿

榎並屋勘七殿

芝辻長左衛門殿

榎並屋勘右衛門殿 御報

巳(寛永六〔一六一九〕)年九月二一日

尚々 御ひさだいの「御筒ニ而候間、何もかろ目ニ
此注文」之鉄目少もちがいなくかツかうよく、「第一あたり
つよミたい金物以下万事」可被入念候、以上

一筆申入候、仍「相国様江松平山城守殿」る御鐵炮
御上被成候ニ付而、「様子之義拙者へ御尋被成候」
間、注文を以申入候

一式挺ハ筒長サ三尺三寸「鉄目六百六匁、玉目三匁五
五分」棹台也

分丸台也

右五挺之御筒此外之所者、当夏両「上様ら被 仰付
候御持筒」注文ニ少茂不相違様ニ可成程「可被入念候、
但是ハ何れも」はかね筒にてハ無之候間、「可有其御心
得候、乍去常之」持筒らちと被入念を「鉄なときたい
以来、きず」ふくれ出来不申候様ニ「万事」被入念を
御鐵炮壹挺ニ「五人ツ」の判切付可被「申候、已來惡
事有之ニ付而者各可為迷惑候、為念如此候、恐々謹言
(別筆)「寛六巳」 稲富宮内少

九月廿一日

(草名・花押)

芝辻理右衛門様

榎並屋勘左衛門様

榎並屋九兵衛様

榎並屋勘七様

芝辻長左衛門様

人々御中

(年未詳)一月六日

「」得可有候、「委ハ宮内殿ら」可被仰越候条、不「能詳候、
恐々謹言

稻喜太夫

一月六日

正敬(花押)

榎並屋九兵衛様

芝辻長左様

榎並屋勘七様

芝辻理右様 人々御中

(年未詳)一月六日

尚々不及申儀ニ「御座候ヘ共、早々御下」可然義ニ候、以上
御状、殊只今珍敷「河豚式、被懸御意」忝存候、隨而近日御
下向可被成之由、乍御太「儀御尤存候、將又江戸」より申來
候御鉄炮之「儀、いまた玉目不申来」由、如仰左様ニ候者、推
量二八罷成間敷候間、「御待可被成候、金具台」以下之下地、
用意仕候「様可被仰付候、御鉄炮」被 仰付候鍛治之名、「御
書付候て、便次第二」可被下候、御下向之後、御「鉄炮之御註
文參候者、」自是可申遣候、自然「御急ニ付可申遣為候間、」
扱申入候、猶爰元御用之「儀御座候ハ、可被 仰越候、」恐惶
謹言

板倉周防守

二月六日

重宗(花押)

北見五郎左様

御報

午(寛永七〔一六三〇〕)年二月二日

尚々両 上様被 仰付候「御持筒もはやとく出来

可申と」存候処ニ今迄致遲々候之儀、「各御油断と存候、御いそき」可然候、隨而松平山城守殿ら「上様へ御上被成候御鉄炮此中爰元へ参着候、「何もだいのいおりすくなくたらず候て、その上」台木あしく木目ことのほかあらく、いき出」その上ゆがミ申候間、此方ニテたい仕直し「可申候間、其方らたいや方へ代御越可有之候、「以来も御持筒たい木の分ハいちゐあかかし」はずあかかし、おのく御とゝへ候て、御させ可有候、「たいや次第二てハ何時も此分ニ木あしく候ハんと」存候、今度参候五挺之内勘左・理右てツほう」一段よく候、何も鉄炮之義万事被入御念」可然候、何とぞさうニ候間、各不念と存候、以上、

御状具令披見候、仍「相国様ら被 仰付候御」番筒五百挺御ためし以下迄出来、水野河内

守殿・大岡」伝左衛門殿・太田次郎左衛門殿ら御」状相副御下候、慥ニ参着御」請取、則御鉄

炮五百挺之」代銀繩筵之代共ニ銀子合」弐拾壹貫六百四拾八匁三分□「手形、杉浦内蔵允殿ら

大坂」御かね奉行衆へ取進候、并「銀子不致遲候様ニ御年寄衆」

ら之御添状も取進候間、早々」

右之銀御請取可有候事、

一相国様ら被仰付候御持筒「拾五挺之内、三尺三寸はらせ申事」可相止之旨、御詫ニ候之間、「其御心得可有候、三尺三寸五挺之」かわりニ三尺壱寸丸台其方へ「注文遣候通ニ御張替可有御下候事、

一駿河 大納言様五百挺之御「番筒ためし以下迄出来次第、」可有御左右候、今切御手形取「可進候、隨而此五百挺之御番筒」何も上戸口ニなりよくひづミ「かたもミ無之様ニ御もませ色御付させ」候て可有御下候事、

一永井信濃守殿ら御番筒弐百「挺御誂被成候間、不及申候得共、可成」ほど被入御念、各壱人別ニ而「三拾六挺ツ、五人ニ而、都合百八拾」挺御はり可有候、残弐拾挺ハ「次太はり被申候間、其心得可有候、」是又出来次第可有御左右候、「ためし江戸へ御取候様子代銀之」事ニ付御状共取可進候、是も「弐百挺ながら上戸口ニ而候間、可」被入御念候、筒尺弐尺八寸、鉄目「六百五拾目、玉目三匁五分、たい」しり長サ壱尺壱寸五分、たいのいおり「弐寸弐分、此外之所々ハ万事」上様御番筒のことく可成程可」被入御念候、猶追而可申達候、「恐々謹言、

稻富宮内少

(草名・花押)

午

一月十二日

榎並屋勘左衛門様

榎並屋九兵衛様

榎並屋勘七様

芝辻長左衛門様

芝辻理右衛門様

御報

(寛永七〔一六三〇〕年)二月一五日

猶々此度者、御鉄炮共」たいかな物以下ニ、より一段と「一入
念入申候由、能々宮内・」喜太・拙者共、御年寄衆へ」申上候
間、可御心安候、御持筒」不及申候へとも、よくくく「きたい、
当きすふくれ」□不申候やうニ、御はり」御下可被成候、當
年者」御上洛相延申候間、「來年者罷上、万」可申入候、以上
相國様被 仰付候五」百挺之御鉄炮、今」度者「一入御念御入」出
來申候由、其通宮内殿・」喜太殿・拙者も委御」年寄中様申上
候、「代銀之事其元ニ而」御請取はつニ而、其御手形參候、御請取
可被成候、「道程もむつかしく候ニ、」其元ニ而銀御請取」候事、
一段之御事と「存事ニ候、御持筒之」事も御このミニ御座候、「宮内
殿ら可被仰遣候間、「拙者共ニハ具ニハ不申入候、「先可申候、為
御音信」見事之縫薄之帶」壹筋送被下候、思召寄「御心付一入
悉存事候、猶重而吉事可申入候、「恐惶謹言

野村藤三郎

二月十五日

正直(花押)

榎並屋勘左衛門尉様

同九兵衛様

柴辻長左衛門尉様

柴辻理右衛門尉様

人々御報

(年未詳)一月一五日

返々此度之御鉄炮ハ「各大事と可存候、以上、
一書申遣候、如此隨御」年寄衆御鉄炮之「義、重而御状ニ御年
寄」衆御状并稻富宮内殿」御注文此方ニ留写を致」遣候、右之
内式百挺者」江戸ニ而被 仰付候、弥此度堺筒不念ニ候ハヽ、」
一代之名ひけ、又我等「まても不念ニ申付候様ニ」不可思召候間、
一代ニ無之」各申合致苦勞念「入可申候、よるひる精入」急可申
候、恐々謹言、

北五郎左衛門

二月廿五日

勝(花押)

芝辻理右衛門殿

榎並屋勘左衛門殿

榎並屋九兵衛殿

同 勘七殿

芝辻長左衛門殿

まいる

(年未詳)三月朔日

以上、

一筆申入候、従「將軍様扱鉄炮」被仰付候由候間、念を「入、
張候て上可被申候、「初而被 仰付候間、早々」出来仕様ニ可
然候、「不及申候へ共、油斷」有間敷候、五郎左衛門殿へも「可
被仰付候、恐々謹言、

板周防守

重宗(花押)

三月朔日

芝辻理右衛門殿

榎並屋勘左衛門殿

(寛永七〔一六三〇〕年カ)六月二八日

尚々万事河内守殿ら「委細可被仰遣候間、不及」申候へ共、
萬河内守殿御「差岡次第二可然存候、將又駿河」大納言様
御説被成候五百挺之御番筒「つよミなりかつかうあたり可
成ほと」被入御念、出来次第申左右可有之候、「是又今切御
手形とり候て、可遣之候、「次ニ我等義湯相当致、此十日時
分に」罷帰、十五日ら 御前へ罷出、一段と「そくさい候て、
前々のことく御奉公仕候間、「可御心安候、今度者永々御
逗留之処、「何之御馳走も不申に今御状多候、「乍去何も仕
合よく被御登我等一人と」満足申候、くれぐれ御てつほう
との義、「ねんを入れられ可然候、猶河内守殿ら」可被仰遣
候、以上

水野河内守殿ら人被遣候由ニ「て候間、一筆申入候、從」相国
様被仰付候五百挺之」御番筒御ためし之儀、各ニ被「申候通、
河内守殿と御談合申」具ニ御年寄衆様へ申上候へ共、「已來請
おい之手形之通、「一切御合点無之候、此以前之」ら今度之御
番筒改之儀、「一かと被入御念御ためし候て、「尤之由被仰候
間、大岡伝左衛門殿・「太田次郎左衛門殿へ去年御年寄衆」ら
參候御状并拙者より「御両所へ之書状御届候て、御」兩人御た
めし御改相済次第」御返状御取候て、此方へ御越可」有之候、

其上今切御手形取可進候、不及申候へ共、鉄炮ニ「御両所之判御切付たいかな物」以下までよく被改候様ニ「各ニ申度被仰可然存候」將又右之御状おそく相届」くと御両所御不審被成候ハ、「去年ら江戸へ御目見ニ「罷下此御状路次ニ而うけ」とり、此中罷登候故、延引「めいわく仕候と被申可然候事

一今度從 相国様十五挺」被仰付候御持筒之内、三尺三寸いかにもかるくと重而」御このミ被成候間、三尺三寸之「鉄目六百三拾目ニ御はり度」可有候、此外丸台之分者」右注文之通ニ可被致候事

一今度從 将軍様被仰付候」御持筒はかねてつほうはり」被申候時分河内守殿ら人御添御見せ可被成候と、此中御談合申候へ御見せ候ても何之合点も「有間敷候条、御出被成間敷候由」被仰候間、弥々万事被入御念」御鉄炮つよミあたり張、精ニ可成」ほどニ入念可然存候、恐々謹言

稻富宮内少

六月廿八日

(草名・花押)

芝辻理右衛門殿

榎並屋勘左衛門殿

榎並屋九兵衛殿

榎並屋勘七殿

芝辻長左衛門殿

人々御中

(寛永七〔一六三〇〕年カ)六月二九日

尚々此以前被仰付候、御鉄炮「惡敷由被仰候間、此度之
御」鉄炮台金具以下迄如何にも「可被入念候、已上

従稻富宮内殿御状被遣候」間相届候、従公儀被仰付候「御
鉄炮共可成程被入」念尤ニ候、別而御持筒つ「よ見あたり不大
形念入」はり可被申候、於様子ニ者「宮内殿る可有御申候、然
者」内々宮内殿を以御理申度と被申候義、御年寄「衆へ具三
御物語候御返事」之旨、従宮内殿可被仰候「御鉄炮共、去年
被仰付由」候間、隨分急可被差上候、「謹言

水河内守

六月廿九日

守弘(花押)

芝辻理右衛門殿

榎並屋勘左衛門殿

榎並屋九兵衛殿

榎並屋勘七殿

芝辻長左衛門殿

39 稲富重次書狀

(年未詳)六月二二日

尚々早々御音信「過分ニ候、万事」面談ニ可申承候、以上
早々被入御念、御飛」脚、殊諸白壺樽、「たまり小樽壺、干漬」
百本贈給、遠路」御心付之段、別而器」令賞翫候、仍」御目見
之義、いつも之」時分ニ可然存知候、「恐々謹言

稻宮内少

六月廿二日

(草名・花押)

芝辻理右衛門様
榎並屋九兵衛様
榎並屋忠兵衛様
芝辻長左衛門様
榎並屋勘左衛門様

御報

(年未詳)七月二二日

尚々今度堺衆「上申候十挺之内」、あたり「よき御筒壹挺も」無之候と、上下共御わらい候間、「万事被入御念、能様ニ可然」存候、以上

態申入候、仍今度「大御所様へ各上被申候」御鉄炮 御説ニ而致糺明候処ニ、何茂「あたり十分ニ無之候、「其上くろかねなと一夢」時分ニ相替、無穿」鑿と見べ、ふくれなど「出申候間、以来之義」被入念可然候、か様ニ而者、「五人衆上手と世間」にて申かたく候、父子共「十人の衆ためニ候間、「万事被入御念、よく」候ハんかと存候、今度「十挺上り申候鉄炮」之内、不残直しニ「其元へ参候よし、「御合点可有之候、「付而者台金物」悪敷候条、かた木ニ而」長サ六尺斗ニ、定木」けつらせ、御越可有之候、「たいのいをり金物之」様子、このミ申度候、「書付切々越申候処ニ」如此違申候事、「不審ニ存候、恐々謹言

稻宮内少

七月廿二日

(草名・花押)

芝辻理右衛門様

榎並屋九兵様

榎並屋七様

芝辻長左衛門様

榎並屋勘左衛門様

御報

(年未詳)八月一日

尚々壱人して式拾挺ツ、はり可被申候、以上

態申入候、仍井上主計頭殿御番筒百挺御誂被成候、

一箇尺三尺常の丸台

一玉目三匁五分玉

一鉄目六百七拾目

一氣ふり返しなし

一台尻壺尺壺寸五分

此外之所者両「上様御番筒如注文ニ」可成程可被入念候、「不及申候へ共、五人能々」被仰合、万少も不違、「百挺分一樣ニよく揃候様ニ」はり可被申候、少茂「為違所候者御請取被成間敷候間、其心」得可有之候、くれぐ「両 上様如御番筒と「申入候上、くとき申事ニ」候へともつよミ内上並業恰合台金物」以下迄、「一かと念を入」はり上可被申候、出来候ハ、我等方へ被仰越」へく候、ためしの状取「候而越可申候、寸相も」玉一二て惣々逢候様ニ「被入念尤候、恐々謹言

稻宮内少

八月十一日

(草名・花押)

芝辻理右衛門様

(※この箇所に追而書あり)

榎並屋九兵衛様

榎並屋忠兵衛様

芝辻長左衛門様

榎並屋勘左衛門様

参

(追而書)追而申候、つまミ竹のふし」此以前之ハなり悪敷候間、「善四郎火ふたのことく竹のふしなり能、「火ふたかねあつニ御させ可有之候、「たいかな物持筒ら可被入念候、以上

米津親勝書状

(年未詳)三月二十四日

以上

急度申付候、仍石火」矢之下地「三挺程も」可致由成小ら申
来候、「大のへの鉄只今」請取被置候分ニテ、「三挺ほとも可
有之」候哉、若不足ニ於可有之ハ「猶重て請取可被」申候、返事
次第小」作へも其通可申候、「炭之儀をも用意」可然候、自然
御誂「筒などハ無之候や、「若於有之ハ由断」被申ましく候、
恐々」謹言

米清右

親勝(花押)

三月廿四日

芝辻理右衛門殿

並河源介殿

安藤直次鉄炮覚

寅(寛永三〔一六二六〕)年八月六日

鉄炮覚

一弐挺 三匁五分玉、但三尺三寸 芝辻理右衛門

一壱挺 玉目尺右同断

榎並や勘左衛門

一壱挺 玉目尺右同断

同九兵衛

一壱挺 玉目尺右同断

芝辻長左衛門

一壱挺 玉目尺右同断

榎並や勘七郎

合六挺也

右候てハ 上様へ上ケ申候間、可成「程被入念、来月五日六
日比二出来候様ニ、」憑入候、委細者小谷作内方へ申渡候、以
上

寅八月六日 安帶刀(花押)

五人衆中参

天保一五(一八四四)年正月

(表紙)

「

御願書

芝辻長左衛門

芝辻理右衛門

榎並屋勘左衛門」

乍恐御由緒書左ニ奉申上候

御鉄炮師

芝辻長左衛門

芝辻理右衛門

榎並勘左衛門

一今般二条 御城内焼損シ御鉄炮御修復「仕様直段積り被為
仰付難有仕合奉存候、

私共儀六

権現様從 御代御鉄炮御用被為 仰付「相勤張立上納仕、
御上意ニ相叶段々御用相勤御目見被為」仰付続而

台徳院様

大猷院様

嚴有院様

右御同様御用相勤御目見被為 仰付候

一元和九亥年七月

大猷院様堺江被為 遊」御成候節、松平伊豆守様御披露を
以御目見「被為 仰付、則其節御礼之場所御差囗」として堺
御奉行喜多見五郎左衛門様る之」御書翰今ニ所持仕罷在候
一大坂御陣以前三々五分玉御鉄炮五百挺」「六々玉御鉄炮五
百挺都合千挺急々張立」被為 仰付早速仕立上納仕候處、
大坂御陣之」御用ニ相立候由

一同節大坂江」御出馬被為 遊候砌、私共先祖御陣所江」被
為召御鉄炮火穴不通シ、或ハ金具」工合直シ玉鑄立画夜相
詰右御用相勤申候

一同節御陣中二車仕掛け御仕寄せ大（橋力）」被為 仰付、早速仕
立奉差上御用相勤申候

一同節人之額ニ当テ候焼鉄丸之中ニ秀頼、「同丸之中十文字

右武品鉄二而相仕立候様」被為 仰付早速相調上納仕候、

右御絵囗」被下置成瀬隼人正様御直書共今ニ芝辻」理右衛
門所持仕罷在候

一大坂御陣後京都二条 御城江被為遊「御成候節、御陣之砌
相勵候人數成瀨隼人正様」を以、御沙汰被為 在候處、私
共先祖も被為「召御陣之節首尾能御用相勵候段」御目見之
上「御称譽之奉蒙」御上意候御事、其後芝辻長左衛門相果
跡目「相続之儀二付、堺御奉行石河土佐守様ら被」仰付繼
目為御礼江戸御表江罷出候節之「御書翰今ニ所持仕罷在
候

一 厳有院様御代寛文十戌年十二月朔日於 御白書院御目見
被為仰付、其節御鉄炮三匁玉壱挺、式匁玉壱挺、壱匁玉
壱挺、右三挺奉獻上候、其砌御老中御月番土屋但馬守様
御留主居、御月番大久保右京様御簾笥御奉行恒岡新左衛
門様、勝部五兵衛様、同月三日北條右近様、瀧川長門守様、
板倉市正様、大久保右京様の御暇被下置其節大判并呉服
拝領仕候

一 延寶三卯年十二月廿八日榎並左衛門繼目之御目見為 仰
付候節

御鉄炮三匁玉壱挺 榎並左衛門

同 壱匁玉壱挺 榎並治太夫

右奉獻上候御老中御月番稻葉美濃守様御留主居、御月番
戸田備後守様、御簾笥御奉行御月番勝部五兵衛様同月廿
九日御暇被下置候節以前之通大判并呉服拝領仕候

一慶長十六亥年三月御懇之以 御上意御鐵炮玉目壹貫五百
目長壹丈元口壹尺三寸末口壹尺壹寸之大筒張立被為 仰
付、芝辻理右衛門相動上納仕候、其節之御絵図今二所持仕
罷在候、其後右御鐵炮 紀州様江御譲り被為在候故

一御本丸御玄関前鉗御門銅瓦御用被為 仰付則平瓦九千百
六拾五枚、丸瓦六千四百三拾五枚、榎並勘左衛門御用相
勤奉上納候、為御手本被為 下置候、御紋付胴丸瓦壹ツ今
二所持仕罷在候

一御用相勤候御鐵炮旧記相分り候分左之通

公方様御持筒、拾三挺、元和九年亥年

公方様御持筒、七挺、右同年

御番筒、五百挺、寛永元子年

御香筒、八百挺、右同年

相國様御用、三匁五分玉五百挺、寛永六巳年

公方様御持筒、拾五挺、寛永七年

相國様御持筒、三匁五分玉拾五挺、右同年

御番筒、六百三拾三挺、寛永十一戌年

公方様御持筒、七挺、寛永十二亥年

公方様御持筒、貳拾壹挺、寛永十三子年

但鍛鋼卷張御筒

御番筒、七百六拾九挺

御番筒、五百六拾三挺、寛永十六卯年

御番筒三匁五分玉、
同玉、四百六拾壹挺、寛
カ未年

御番筒、貳百九拾五挺、正保四亥年

御番筒、六百挺、万治亥年

六月廿五日上納

御番筒、六百挺、万治三子年

十月廿五日上納

右之通御用被為仰付相勤張立上納仕候御事

(付箋)「并ニ安藤帶刀様之御書翰今ニ所持仕罷在候」

一塙表ら江戸御表江御鐵炮拾五挺上納仕候節、御關所為御證文成瀬隼人正様ら人大澤少將様・近藤登之助様・江間與右衛門様江之御書翰今ニ所持仕罷在候

一明暦三酉年江戸御表大火ニ付御金蔵燒金銀吹分翌戌年為仰付相動申候

一公方様京都二条御城江被為遊御成候砌、同御城内御鐵炮大小九拾挺御修復被仰付候付、板倉周防守様ら御差図之御書翰芝辻長左衛門今ニ所持仕罷在候、其頃迄唯今ニ至

迄二條御城内御鉄炮御用相勤來り候段、冥加至極難有仕合奉在候

一天明八申年京都大火之節燒損シ之」御鉄炮御用立候分仕
分ヶ被為 仰付、於「京都ニ數日逗留仕右御用相勤申候、然
處「今般右焼損シ御鉄炮御修復直段積り」被為 仰付難有
奉畏候、則別紙帳面」奉差上候、前段奉申上候由緒之もの
共ニ「御座候間、何卒私共江御用被為 仰付」被下候様、乍
恐偏奉願上候、以上

天保十五甲辰年正月

榎並勘左衛門

芝辻理右衛門

芝辻長左衛門

御鉄炮

御奉行様

43 御番所江差出候願書之覺

文政三(一八一三)年九月

(表紙)

「

御番所江差出候願書之覺

芝辻理右衛門控

乍恐以書付奉願上候

御鉄炮鍛治

榎並勘左衛門

芝辻理右衛門

芝辻長左衛門

一私共儀者先祖右御鉄炮鍛治二而元來榎並「勘左衛門・榎並屋九兵衛・榎並屋忠兵衛・芝辻」理右衛門・芝辻長左衛門右五鍛治二御座候處、「先年九兵衛・忠兵衛両家とも追々家名」断絶仕、其後者私共三鍛治二而御用向相勤」來、外平鍛治も御座候得共由緒等無御座候、「私共儀者」權現様三州岡崎御在城之節右御鉄炮之御用「蒙仰、依之慶長十九年寅年」權現様 台徳院様大坂御陣御出馬之「節、御陣所へ相詰、御鉄炮具合直并玉鑄」立御用相勤、大坂落城御凱陣後二条」御城江被為成、私共五人被為召御陣中、「私共勵

方神妙ニ被為思召候段御褒美之」蒙御上意、其砌追而
御切米御扶持等之」御沙汰可被為在趣、成瀨隼人正様ル御
内「意御座候得共子細有之、勘左衛門儀者御内々」御辞退
奉申上、永ク御鉄炮御用被為」仰付候得者、冥加ニ相叶難
有仕合之段相」願、理右衛門・長左衛門者兄弟家ニ而理右
衛門江」御扶持御切米被下置、其後「大納言義直卿様御附
之鍛治罷成、當時ニ至り尾張様る先規之通被下置候、勘
左衛門」儀者御宛行者無御座候得共、江戸表江」被召出、
道三河岸ニ而屋敷地拝領仕候所、其「後御用地ニ付被為
召上、所々ニ而御替地」被下置候處、宝永元申年十一月
類焼ニ而明地ニ罷成、夫ろ願之上堺江引取申候、「右躰之
由緒故、」台徳院様・大猷院様御上洛之節者、三鍛治共御
目見献上拝領物仕、勘左衛門儀者」巖有院様御代迄参府献
上物仕、御目見」之上大判・御時服等拝領仕候、其砌迄者」
江戸表より追々御用筒被仰下、且又「諸御大名・御旗本
様方より御誂御座候而、「甚以職分繁多ニ而、私共初平鍛
治とも」都合三十軒余も御座候處、追々職方手」透半分も
相減、難有御治世故江戸表」之御用并御大名様方御誂向も
無御座、漸山分御免之獵師筒又者百姓威筒」張立候而已ニ
而、職分相続難渉至極仕候、「江戸表御鉄炮鍛治之向者御
場所柄と」申御扶持等も頂戴被致候由承知仕候、私共」儀
者職分一向之儀ニ而、手遠ニ罷成候而者」難立行、何卒先

年之例を以、御用筒之」分相当ニ御用奉蒙 仰度此段御憐
愍「奉願上候、尤明和式西年当御役所江」御断奉申上、江
戸表江三人物代罷下り御」鉄炮御奉行田附四郎兵衛様・井
上左太夫様江三人之者共之由緒書を以御願申上候處、追
而「御沙汰可在御座旨ニ而、罷帰り其後御沙汰無」御座候
一前段奉申上候通之由緒故、従往古る二条大坂」御城附御鉄
炮御修復之義者凡十ヶ年目ニ」往古より私共江被 仰付來、
大坂之分者猶「其上平鍛治之者江私共より入札申付落」札
之ものニ私共之内年寄役之者壱人「付添、大坂御鉄炮御奉
行御役宅江罷出御」用承り、其上ニ而右落札直段を以入札
仕候」もの共江、私共手前ら細工申付出来立見」改相納候
仕来ニ御座候、然ル處近年大坂」御鉄炮御奉行河内佐太郎
様御在役中」平鍛治江直入札被 仰付候ニ付、外鍛治」方よ
り格別下直ニ入札仕、其もの江御修」復被 仰付、右直段定
直段ニ御取究メ」年々御修覆被 仰付鉄炮之義者御修」復
たり共聊手抜仕候而も甚以危き武器ニ御座候得者、安直
段を肝要ニ御見込被遊候」而者、却而御為ニ不相成、且右
御修復ハ「由緒を以私共仕來り候處、右躰ニ成行」候而者由
緒之規模も無御座、家名ニ相」抱相続難成歎ケ敷次第二奉
存候、何卒「御憐愍を以古來之通被為仰付候やう」仕度、
此段御沙汰被成下候様奉願上候

一近來御諸家方御用向も無數、鉄炮職」相続難出來、追々及

古却、前段も奉」申上候通、三十軒余も御座候、鐵炮鍛治
當時「十五六軒斗ニ罷成候、職分手透故山分」御免猶師筒。
百姓威筒等之分不相当」之安直段ニ張立受取差出し候もの
も有「之、鉄炮之義者前段奉申上候通手抜等致「張立候而
者、土地名折ニも罷成候付、依之古」来る力ためし仕、龜末
無之様相試候上差」出候武器ニ御座候處、右躰下直ニ張立
候而者」堺名產之名目ニ相抱り仲間一統衰微之「基ニ可相
成ニ付、寛政年中申合夫々直段」も凡相定、銘々帳面所持
仕罷在候所、近「年猥ニ相成、前々仲間取定不相用様」成行
弥衰微仲間沾却之基ニ而、歎ケ敷」奉存候、依之向後先年
取極之通相守、安」筒張立不差出候様、年寄役之者見改壹
ヶ」挺毎ニ改極印を打差出候やう仕候ハヽ、不「正之鉄炮取
扱不申、極印無之筒差出シ」候者ハ、御断奉申上職留被 仰
付候やう御」取締之儀も奉願上候

右三ヶ条御憐愍を以御聞済被為 成「下候様、御歎奉申上
候外、平鍛治ハ格別私」其儀者先祖ら「御公儀様御用第一」
之職分ニ而相続仕候處、江戸表御用者」皆止ニ相成、近年
大坂 御城御鉄炮」御修復之分も平鍛治へ直入札ニ相成、旁
以相続難出来武百年來由緒之御蔭を「もつて相続仕来候處、
銘々沾却ニおよび候」躰ニ付、為御取立御助成之御手当奉
願上「度奉存候得共恐入候ニ付、格別之御憐愍」を以、夫々
御沙汰被為 成下候ハヽ、取続」も出来仕候ハヽ、廣太之御慈

悲難有仕合奉」存候、以上

芝辻長左衛門

文政三辰年十月三日

芝辻理右衛門

榎並勘左衛門

御奉行様

文政三辰年十月三日五ツ時より当御番所江三人共罷出候、尤願書御下役松永助四郎さま江内々入御覽ニ、夫ら御役所江差出ス、尤御武具方伊藤吉右衛門さま御覽之上、願書其まニ而預り置、追而御沙汰可有御座旨ニ而罷帰り候事

伊藤吉右衛門様

當時御武具方

中村衛門八様

磯貝弦十郎様

御下役

松永助四郎様

同十一月十一日三人之外惣仲間昨日御召ニ而今日罷出候所、近年鉄炮鍛冶共家職みたりニ相成、交易同やうの仕方共御上之御聽ニ達し不埒之事共ニ被思召、此度之御召其まゝ返すべく者共ニ不有、乍去是迄之儀者御慈悲を以御免被遊候間、已後急度取締をいたし十日之間可申出様被仰渡候事

但し今日之御役人御向ひ与力上条作右衛門様ら右之次第
被仰渡候事、其後此一件右上条さま之

懸りニ相成候事、右二付十一月廿一日外仲間より取締御答
奉申上候處、先追而御沙汰可有儀被 仰渡候、十一月晦日
井川・鳴谷・田中・榎佐・嶋市五人被召出風聞御聴御叱之事
十二月朔日三人之者被召出仲間取締之仕方存寄書付申可
出旨、被仰渡候處、五日之間御猶予御願申上罷帰り候
二日、右五人之者外ニかごや・井上・田中被出召取締返
とう申候

十二月五日、三人之者取締之儀申出候所、文言あしく直し
候處手間取明六日取締願書預り置、追而御沙汰、願書文
言左二

乍恐口上

御鉄炮鍛冶

榎並勘右衛門

芝辻理右衛門

芝辻長左衛門

一近來平鍛治共不取締ニ而古來之鍛治を忘却仕、他國へ持出
壳捌等仕、交易同やう之仕方共、達御聽先達而平鍛治之
者共一統被出為召、不埒之段奉受御察、当右二付去ル朔日
私共三人被為召出向後取締之儀存寄可奉申上旨為 仰付
奉畏乍恐左二奉申上候

一鉄炮年寄之義者仲間取締第一之義ニ兼而差心得罷在鉄炮
も申聞御座候得共兔角ニ近來作法を相背、自儘之取扱等
仕、又者逃主之好ミニ忘シ、仲間内之鍛治銘を彫付候向も
有之哉ニ風聞も御座候、尤何れも当産業之義者御武器第
一不輕職分ニ御座候處、無其義却而商人売物同様之取扱ニ
罷成、仲間追々衰微仕候段、甚以歎ケ敷次第二奉存候處、
此度御察當之趣者鉄炮鍛治之者共、古來ニ立戻り候御趣
意ニ而難有仕合奉存候、乍去是迄紛敷鉄炮取扱候而也可
改糺鉄炮ニ目印無之、向後取締仕候ニおいては御免

威筒并獵師鉄炮等壹丁毎ニ目印相加ヘ候ハヽ、紛敷銘も難彫
付、自然紛敷鉄炮取扱候節者取押目印之有無ニよりて、如
何やうニも取締出来候儀ニ御座候、若改目印無之鉄炮取扱
候を及見候ハヽ、職留も被為仰付候御趣意ニ御取極メ被下置
候ハヽ、私共無油断急度取締可仕、左候ハヽ、自と不正之筒も
無御座候、尤右ニ付而者日々鉄炮屋之者共目印更ニ罷越シ
候ニ付、私共一同立会居り玉目寸尺見分之上、已前御窺上
之有無相糺手元ニ目録取扱手堅取締候ニ付者、自ト携人足
等も臨時ニ相懸右雜用諸賄として百姓威獵師筒何れも壹丁
ニ付銀壹匁ツヽ、申受度奉存候、右目印雛形左ニ

(図あり)

鍛 芝辻理右衛門

治 芝辻長左衛門

右之通三鍛治ト申目印鉄印ニ而取扱申度奉存候、尤印打所
火皿擇元ニ相定申度候、

一年分百姓威并猶師筒壹年分之出来高凡九百挺斗リ御座候
一鉄炮直段之義者寛政年中ニ申合候通左ニ申上奉候

玉目貳匁^ル三匁五分迄

一鉄炮 長三尺五寸まで下直之所

台目通金具一ト通り

代銀百十匁

一同 中直段台木中空

象眼入

代銀百三十匁

一地鉄巻張台木目通

代銀百六十匁

一釦巻張下直之所

代銀百五十匁

一同台木中空象眼入

代銀貳百八十匁

一拾匁玉長貳尺^ル貳尺五寸迄

代銀貳百五十匁

右者先達而通直段ニ御座候間、此向より決而下直ニ受取不

申やう定メ置申度奉存候

一此外ニ駒木根流ト申者一派在之候鉄炮に御座候間、直段高下難定やう奉存候

一私共義者是迄逃受候注文者互ニ三鍛冶内る改合仕、尤古来る右之姿ニ御座候間是迄通取締度奉存候

一鉄炮荒地鐵板広ケ候節一々間違無之私共江申出候やう被為仰付、此段奉願上候、左候ハ、毎月朔日十五日ニ窺出候、「鉄炮ニ引合と挺數相改候ハ、窺ニ洩候」儀も無御座哉ニ奉存候、左候ハ、前文之始末ニ而取締候ハ、乍恐行届候義哉と奉存候間、何卒此段御聞届被為成下候ハ、往古同やう之鉄炮師ニ立帰り仲間一同繁榮之基と重々難有仕合可奉存候ニ付、乍恐此段以書付奉申上候、以上

文政三歳辰年十二月

御奉行様

明レハ文政四辛巳二月朔日月次鉄炮伺ひニ勘左衛門罷出候所、明日其方共三人并仲間頭立たる者五六人召連罷出候やう仰被聞、二日右ニ付かごや・井上・田善・井川・嶋屋・榎伊右六人召連罷出候所、六人之者被召出被仰渡候やうハ、昨年取締之儀申付候所、三人より取締申出候儀も尤ニ被思召、尚又其方共存付も隨分尤ニ思召候得共、右三人ハ旧家之者共永続為致度上みニも被思召候得共、於御上み取立候筋合も無之、然ル處三人之者取締之儀者鉄炮壹丁毎ニ

見改目印相加へ候ハ、紛敷儀も無之やう申出候、此儀御上ニも隨分筋立尤成儀と被思召候、乍併右極印打候得者雜用等相懸候事故、仲間一統申合セ御受可申上候、右三付十日ひのべ御猶予願罷歸り候、其次三人被出召被仰渡候様者、冬年其方共願出し置候取締之儀今日仲間江申渡置候間仲間る何事を申参り候とも、相手ニ成ナ上み江任セ候やう被仰聞難有御受申上候

仲間一統二月十式日罷出候所御答も出来兼候ゆへ最三日之間御猶予御願申上候、則相済罷歸り候、二月十三日天王寺屋喜八郎榎勘宅へ被参いろいろと相拶ニ被參、何分極印之所御願下ケ被下候ハ、其上者御差図ニまかせ取締可仕候、四本柱ニ而勝資御座候而者、已後何とやら御互ニ氣之毒只管黒札之内取斗ひ度由度々中参り候得共、三人者御尤成御事なれ共私方ニも一旦願ひ出し候儀、今更願ひ下ケ之致方も無之候間何分上みニ而善惡之上仲間ニ能取締も御座候ハ、其方へ可付候と申切候、然ル處十五日仲間一統御役所罷出候處、極印之儀者一統不承知ニ御座候、年寄手前ニ極印ならで取締出来兼候ハ、仲間ニ壹人年寄相拵取締仕、其上抜賣等も御座候ハ、御上みる御直ノ被仰付度杯と申候由、上條さま御利解被下候書付御取上、追而御沙汰又三人十六日被召候、

(付箋)

「所延刻ニ而明日十七日罷出候所、上條さま御風邪ニ而追而
御沙汰二月廿二日被召出式人共罷出、理右衛門風邪ニ下宿
迄罷出候所、追訴願文差出し候所よろしく御取上ヶ被下候
而、明日罷出候やう被仰聞候、二月廿三日罷出候所、理右
衛門風邪ニ而式人出所、上條さま被仰候やうハ仲間ら極印
一統不承知ニ而候へ共仲間」

ら書付差出し候間、何分御上み江差出し御上次第二御座候
間、此分心得候やう被申候、かつ又庄三郎承り候ハ極印ハ不
承知なれ共先鉄炮壹丁付壹匁ツヽ之積りニ而、武家百姓威
獵師筒ともニ極印料として凡年分式メ日斗内半分ハ仲間雜
用又五百匁ハ仲間積立銀殘五百匁ハ年寄手前へ差出し度願
候由承り候

(付箋)

「附二月廿一日被召出候所、理右衛門風邪ニ而引籠長左衛
門者他行仕、勘左衛門壹人罷出候所、極印之儀上條さま被
仰候、御上みニ少々思召違も有之候間、追訴可申上候被仰
聞罷歸り候、追訴願文吉川印ニ頼願書別紙ニ写」

44 鐵炮改年寄血判起請文前書

安永元(一七七二)年二月

起請文前書

一今度私共江鐵炮改年寄被 仰付候」上者、鐵炮方御用向之儀諸事正路ニ相勤、聊以御後闇之儀仕間敷事

一鐵炮屋共、御大名方又者家中ら誣」鐵炮在之節、誣主并鐵炮玉目」等入念吟味仕、私共奧印仕候節、「依怙巖廩なく
嚴密ニ相改可申事

一浪人并寺社方る新筒者不及申、「鐵炮屋共親類知音之好を以、鐵炮」内誣ニ而商売仕候ハ、早速可申上候事

一百性威筒直筒誣成候節、其所ニ相定り候筒數碇と入念致吟味、「私共奧印仕、依怙巖廩なく嚴密ニ相改可申候、親類知音之好を以」内誣ニ而商売仕候ハ、早速可申上事

一御威光を以惣鐵炮屋共江非儀」申掛、私欲ケ間敷儀仕間敷候事

一鐵炮方御用向之儀、不依輕重ニ雖為親子兄弟、他言仕間敷候事

右之条々雖為一事於致違犯者

安永元年辰十二月

鐵炮年寄

芝辻理右衛門

血判

同

榎並屋勘左衛門

血判

御鉄炮方

伊藤吉右衛門殿

同

渡辺又太郎殿

45 大坂城内鉄炮修復関係文書控

安永九(一七八〇)年八月

乍恐以書付御断奉申上候

一大坂御城内御鉄炮御修復落札人四人ニ「私共差添、御鉄炮
御奉行様御役宅江、」明後三日四つ時迄之内罷越候様、今
日被「仰下候ニ付、乍恐御断奉申上候、以上

年寄

子八月朔日

兩人印

御奉行様

別紙ニ落札并年

寄中名前書出ス

乍恐以書付御断奉申上候

一大坂御城内御鉄炮御修復落札之者「四人ニ「私共差添、明三
日四つ時迄之内、御」鉄炮御奉行様御役宅江罷越候様被」
仰下候所、當時榎並勘左衛門病氣ニ居」申候故、私壹人差
添罷越し申度奉存、「乍恐御断奉申上候、以上

子

八月二日

芝辻理右衛門印

御奉行様

別紙名前書差上申候

大坂へ出ス

御請合手形之事

一損御鉄炮 三匁五分玉 百挺

御修復代

惣合銀七貫九百六十八匁五分

右御修復入札御吟味之上、私共落札ニ罷成候、「御代銀不
残御前借之積りを以、御受合申候所」実正也、然ル上者、
仕様明細帳之通、無相違」隨分入念御差図之通り仕立上納
可仕候、尤「五ヶ年之内御修復所ら損申候者、何ケ度ニ而も」
仕立差上可申候、若入札組合中何様之義」出来仕相滞候
ハ、残ル者ら急度御修復「仕立可奉差上候、為後日御受合
証文、仍如件

堺鉄炮鍛次

安永九年子八月

山田佐七

印

嚙鍛次七郎兵衛 印

田中仁兵衛 印

鳴や四郎兵衛

印

右之通相違無御座候ニ付奥印仕候、以上

鉄炮年寄

芝辻理右衛門 印

同

榎並屋勘左衛門 印

御奉行様

堺帰り断

乍恐以書付御断奉申上候

一大坂御城内御鉄炮三匁五分玉百挺御修復「入札、去亥七月
被為 仰付差上置候所、「右御鉄炮昨三日御修復被仰付候
趣、「久留勘右衛門様被仰渡、承知仕御請証文」差上申候、
其上先格之通、御修復御鉄炮」往来之節、御紋付差札御挑
灯之儀并「年寄役兩人差加り候儀、御尋被為」成候二付、此
度之儀も先格之通御願申上」度旨奉申上候処、兩様共御聞
届被成下候、「尤御鉄炮者来ル十五日御渡被下候趣被仰
渡、「夜前罷帰候二付、乍恐御断奉申上候、以上

子

落札之者

八月四日

嶋や四郎兵衛 印

田中仁兵衛 印

噸鍛次七郎兵衛 印

山田佐七印

右之通相違無御座候付奥印仕候、以上

芝辻理右衛門 印

御奉行様

堺断

乍恐以書付御断奉申上候

一御修復御鉄炮往来之節、先格之通御紋付差札御挑灯之儀、
大坂表昨三日御聞届被成下候付、此度之儀も、先格之通
相用申度奉存候ニ付、乍恐御窺奉申上候、已上

子

八月四日 落札四人 印

右之通相違無御座候ニ付奥印仕候、以上

年寄

兩人 印

御奉行様

右両通一所ニ差上御断申上候所、御聞済

46 大坂城内鉄炮修復関係文書控

安永九(一七八〇)年八月

(端裏書)

「八月十二日る

同十七日迄 御断控」

乍恐以書付御断奉申上候

一大坂御城内御鉄炮御修復被仰付候二付、「御修復中御鉄炮往来之節、相用候」御紋付・差札十枚・弓張御挑灯・御紋付六張・同御鉄炮御用と書付候御挑灯六張、合十弐張落札之内、噸鍛冶七郎兵衛る「北はたこ町住よしや嘉七と申者へ相談」申候趣、私共迄相届申候二付、此段「乍恐御断奉申上候、以上

子

八月十二日 年寄兩人 印

御奉行様

大坂行断

乍恐以書付御断奉申上候

一大坂御城内御鉄炮御修復百挺代銀、「來ル十六日御渡し被下候二付、明十三日御銀」受取証文印形御取被成候間、落

札四人、「私壹人差添、御鉄炮御奉行様御」役宅江罷越し
申度奉存、乍恐御断」奉申上候、以上

子

八月十二日 芝辻理右衛門 印

御奉行様

外大坂行名前書添

帰り断

乍恐以書付御断奉申上候

一昨十三日、御鉄炮御奉行久留勘右衛門様」御役宅江、落札
四人私差添罷越候処、「御城内御鉄炮御修復代銀、来ル十
六日「御渡し被成候付、右請取証文印形御取」被成、夜前
罷帰候「付乍恐御断」奉申上候、以上

子

八月十四日 芝辻理右衛門 印

御奉行様

大坂行断

乍恐以書付御断奉申上候

一大坂御城内御鉄炮三々五分玉御修復「百挺、明十五日御渡
し被下候ニ付、鳴野御藏へ「受取ニ罷越し申度奉存、乍恐御
断」奉申上候、以上

子

八月十四日

落札四人 連印

年寄

芝辻理右衛門 印

榎並勘左衛門 印

病氣二付

代清右衛門 印

御奉行様

乍恐以書付御断奉申上候

一御鉄炮御修復中火之元用心手当、「先格之通、仲間之者并
番子共江」申渡置度奉存候二付、乍恐御窺奉」申上候、以上

子 年寄

八月十四日 兩人 印

御奉行様

帰ル断

乍恐以書付御断奉申上候

一大坂御城内御鉄炮御修復百挺、「鳴野御藏江今日受取二罷
越候処、「御渡し被下奉請取、只今罷帰候二付」乍恐御断奉
申上候、以上

子

落札

八月十五日

年寄 連印

御奉行様

乍恐以書付御断奉申上候

大坂行断

一大坂御城内御鉄炮御修復代銀、明十六日」御渡し被下候二
付、落札四人私壹人差添、「大坂へ罷越し申度奉存候ニ付、
乍恐御断」奉申上候、以上

子

八月十五日 芝辻理右衛門 印

御奉行様

文化一〇(一八一三)年九月

(端裏書)「榎並屋佐兵衛鉄砲鍛冶讓り渡一札」

一札

一我等病身ニ付職業相続難成、依之此度鉄砲「鍛冶株之義、私親類榎並屋嘉兵衛江譲り渡」申候所相違無御座候、右ニ付私両人へ親類之様子「尚又不筋之義無之哉、段々御調子被下承知」仕候、全不筋之者ニ而も無御座候、尚御仲間仕来り「御作法之義不相背職業大切ニ相守可申候段嘉兵衛」被申立候間、則今日御切替被下候段、忝奉存候」為後念一札仍而如件

譲り渡主

文化十酉年

榎並屋左兵衛名改

九月十一日

榎並屋駒作(印)

譲り受主

榎並屋嘉兵衛名改

榎並屋佐兵衛(印)

(端裏書)

「籃谷断洩一札」

一札之事

一仲間之内籃谷ゆき代判十左衛門方、去丑年中「逃受鐵砲之内三拾挺斗、御伺洩ニ相成罷在候様、」被仰聞奉恐入候、依之、私共仲間之内ら相改候処、「全御伺洩ニ罷成候義ニ而ハ毛頭無御座、右同人」細工向手透中故、鐵炮地鐵黒皮鞆筒等仕入仕「并台木之義ハ木造り仕候義ニ而、聊以不正之義無」御座候、然ルニ右ゆき代判十左衛門義、仲間作法「無何と不相用、平生不敬ニ相心得罷在候故、若「不正之義も仕候哉之御思召御尤至極ニ奉存候、前文「申上候通り御伺洩等ハ一切無御座、勿論仲間作法之」条々、自今以來無違背、定之通急度相守可申旨」申之候、猶又向後御年寄中ら被仰聞候義、不依「何事ニ無違乱急度可相守旨申立候故、俱々」御託申上候、為後日一同連印仕差入申候処、如件

文政十三寅年正月

嶋内八重

代判 忠兵衛(印)

籠屋平次郎

幼少代判 治兵衛(印)

啞鍛治才次郎

代判 喜八郎(印)

田中安兵衛(印)

松本卯一郎(印)

田中ゑつ

代判為助(印)

田中ゑつ

代判為助(印)

榎並屋熊太郎

代判吉蔵(印)

山田佐七(印)

榎並屋大次郎

代判 由兵衛(印)

榎並屋寅吉

代判 喜八郎(印)

鳴屋喜八郎(印)

井川為次郎

多病代判 利兵衛(印)

山田五兵衛(印)

田中善五郎(印)

井上関右衛門

代判治兵衛(印)

芝辻長左衛門(印)

鉄炮御年寄

榎並勘左衛門様

同

芝辻理右衛門様

49 芝辻長左衛門一札

文政二二(一八二九)年一一月

(端裏書)「芝辻長左衛門ら相良一件一札」

一札

一田中善五郎殿御出入得意先「相良近江守様御家中最所休
左衛門殿ら」武刃八分玉、長三尺七寸之鉄炮壹挺、此度私
方へ「注文來り候處、私得意ニ而ハ無之候故、斷申立」候得共、
矢張私方ニ而此度之處、右筒張立「可致候趣ニ付則善五郎
殿と対談相整、「此度限りニ仕、以來右御家敷御家中ら注
文」新筒直筒共申來り候共、決而致間敷旨「申出候處、御
承り置被下忝奉存候、為其如件

文政十二丑年十一月十五日 芝辻長左衛門(印)

右之通相違無御座候、以上

田中善五郎(印)

榎並勘左衛門殿

芝辻理右衛門殿

文久二(一八六二)年十月

一札之事

一仲間之儀ハ御取締被仰渡御出入先々帳面ニ相定御座候処、我等先代籃谷与三右衛門殿江対し不束之儀有之、御同人御出入先長州様御家中ハ勿論、御領分長州・坊州両国とも百姓ニ至迄、右国向之鉄砲ハ決而譲受不申約定一札差入御座候処、「此度御領分坊州鹿野之住人若屋伴助与申者ニ武匁玉筒」拾挺譲受、同國之内徳山ハ我等御出入先故、右御家中ニ仕成シ「若伴助与武家名ニ取銙、既ニ鉄砲張立可相送場合及露顕、与三右衛門殿江ハ約定違変、就而ハ御役所江相偽」重々心得違何共申訛無御座誤入候、依之、松本宇左衛門殿・籠屋權右衛門殿を以御詫申上候処、未鉄砲ハ、先方江不相渡」眺受相断候故、格別之御勘弁を以此度之義、御用捨」被成下、千万難有仕合奉存候、向後之儀ハ御作法之通、「諸事急度相慎心得違仕間敷候、万一一此以後違背仕候ハ、「如何様之越度ニも御取斗被下候共、其節一言申分無御座候」、為後日一札差入候処、仍而如件

文久二壬戌年十月

山田五兵衛(印)

鉄炮年寄御衆中

安政四（一八五四）年一二月以降

芝辻理右衛門

榎並勘左衛門

芝辻長左衛門

一私共先祖儀者乍恐從

神君様御代御目見被為 仰付、御鐵炮數挺

張立御用被為 仰付候由緒之者二御座候處中絕仕、
多年ニ悲歎仕罷在候處、御時節柄之儀ニ付、■

■■私共相應之御用も御座候ハヽ、為冥加相勤度、
其段奉願上庚題、玉葉御奉行様江之

御添翰頂戴仕、去ル丑年十一月勘左衛門・長左衛門
出府之上、奉願上候處別紙由緒書相添奉願上候處、
翌寅年四月八日私共御召出之上、左之通御書付

を以被 仰渡候

申渡

芝辻理右衛門

芝辻眺左衛門

榎並勘左衛門

其方共先祖御鉄炮數挺張立致」 上納候由緒在

之候ニ付、職業ニ応じ候」御用手間賃銀無代ニ而
勤度段、「相願、依而玉葉方御預御損筒」千七百
七拾挺之分御修復其方共江「願之通被 仰付候
間、入念出精いたし御修復」可致候

右者阿 伊勢守殿江伺之上申渡

寅四月八日

右之通被 仰渡■■、則竹橋御藏地江「■御修復小屋場御建
渡、六月十八日ら細工取掛り」翌卯年八月皆出来上納仕候、
右御用中「為御手当被 下置候段、左之通被 仰渡候

芝辻眺左衛門

榎並勘左衛門

右為御手当一ヶ月銀四拾五匁宛被下之

番子拾人江

右同断一ヶ月銀三拾目宛被下之

﹂

右之通被 仰渡御用済同年九月十日

御召出之上、右之通被 仰渡候

芝辻理右衛門

芝辻眺左衛門

榎並勘左衛門

右者御恩冥加之為、遠路番子共召連「出府之

上、玉葉方御預大小御筒千七百六拾五挺」手間

賃銀無代ニ而御修復いたし候段、「奇特之事ニ付申上候處、
為御褒美銀」五枚宛被下、且番子召連出府ニ付、為御手当」
金三両宛被下之

右者阿部伊勢守殿被 仰渡候旨、御留守居「加藤 伯耆守申
渡候間、此段申渡

九月十日

53 第十世玄道翁死去ニ付諸記録

明治二二七(一八九四)年六月一日

(表紙)

「明治廿七年六月一日午前五時死去

第十世玄道翁死去ニ付諸記録

芝辻第十一世理作手記」

歴史

玄道翁ハ文政^(マ)年十二月十日堺桜町ニ生ル、

父ハ第九世理右衛門助長、母ハ青木氏「春

喜子」ノ長男ニシテ、年十九歳ニテ家督ヲ
継襲セリ

世襲銃製ヲ業トシ家祖道逸入道

ヨリ世々尾張侯ヨリ食録若干ヲ受ク、

翁ニ列り維新廢藩ノ為メ、食録ヲ廃

セラル、累世銃製業ノ取締役ヲ務メ

維新後又其業ヲ継グ、

翁性質質朴実直ニシテ寡言ナリ、

翁壱男一女アリ、皆早世セリ、

』

翁 明治廿三年頃ヨリ中風病ノ徵候アリ、

廿六年九月ニ到リ病勢稍重ク、廿七

年五月ヨリ最モ激症トナリ、終ニ同年

六月一日午前五時命終セリ、往年七拾弐年、

六月二日午後一時出棺、王子飢ヘ葬送

火葬ス、親族諸氏ノ会葬者左ノ如シ、

青木栄三郎氏 山口市次郎氏 藤田専太郎氏

赤澤孝次郎氏 奥野為孝氏代人

高松ます氏 阪田兵次郎氏代人

高松喜介氏 高松文介氏 森内主一郎氏代人

中野忠八氏代人 宇野小七郎氏代人

其他故友・知己ノ会葬ノ者多シ、

(以下略)

覚

一堺稻荷社地私所持仕来り候儀者、「大坂御陣之節堺町中焼失仕候、」其跡更地之時分御奉行長谷川「佐兵衛様堺へ御初入被成、町割被仰」付候處、大坂御陣其以前ら成瀬「御祖父隼人正殿御取持ニ而」權現様御 前江乍恐私祖父度々被為御 召出、鉄炮御用之儀「御直ニ御好被為 遊候處、私祖父」冥加ニ相叶、別而細工御 上意ニ「相達、其上大坂御陣急成節、難調」御上用杯仕上ケ候ニ付、御勝陣之時分」被為御 召出、御褒美被為 下置候、「祖父義右仕合程之者二御座候ニ付、屋鋪」拝領仕候義、江戸ニ而申上、其時分之「御老中様方る堺ニ而屋鋪私祖父」望次第被為 下置候間、御渡候様ニと「長谷川佐兵衛様へ被仰遣候様ニ仕、稻荷」境内ニ不限、稻荷町・梅香町新屋敷迄「八拾七年以前元和元^卯年拝領」仕候御事

一稻荷社建立仕候義ハ、御奉行「喜多見若狭守様時分堺北ノ入口」すほうは見分、惡敷有之候家を「造らせ候様ニと、私祖父ニ被仰付候ニ付、「人々ニ屋敷分つれ候而、稻荷町」梅香町ニ家ヲ造り、其時分る町ニ罷成」于今両町御座候、稻荷境内之所ハ「堺町中之鬼門ニ相当り候故、幸」鍛冶之鎮守神ニ而候間、稻荷」明神ヲ建立可仕と申候間、八拾三年」以前

元和五年未年私祖父時分ニ建立仕候御事

一稻荷二差置申候門守之儀、是又段々「置替申候、尤請狀宗旨手形私方へ」取置申候御事

一稻荷境内ニ而能或ハ哥・念佛・楊弓等「望申候故致さセ候節者、証文私方江」取置申候、尤水茶屋門前ニ居申候床「髮結迄右之通御座候御事

一從前々指置申候宮守り共、下人召抱候」時分者手前之家來ニ仕、宗旨手形「取置申候、当五月廿三日相果申候宝祥院家来共ハ宝祥院家來ニ仕、宗旨手形「私方へ取置申候御事右書付差上申候通ニ御座候、則此段「堺北辺町人共之内、年寄候者ニも様子」能存候ものも可有御座候、其外ニ茂聞」およひ候者も可有御座と奉存候、以上

巳

八月十一日 堀芝辻理右衛門

名代同伊右衛門印

右追加書者今日寺社御役所へ理右衛門御召ニ付、「相煩罷有候御断ニ、伊右衛門罷出候處、山本長右衛門殿・中嶋」藤内殿御兩人御出御座所、右御断申上候得者、先日申渡候、「御書付致參候様」と被仰渡候ニ付、其段ハ先達而粗「書付三月晦日中嶋藤内殿へ差上申候由、伊右衛門申候所」儀候、其段失念申候、然らば其通り書付出候様」と被仰渡」故、去月晦日之通

り書便出候所、右三ヶ所書かへ候様ニと」被仰渡候故、如右之
書付出シ申候、以上

稻荷大明神正遷宮ニ付断書

享保八(一七三三)年六月一八日

乍恐御断申上候

一稻荷大明神正遷宮之儀、去ル十六日之夜仕、昨日迄ニ相勤、」仕舞申候ニ付、乍憚御断申上候、以上

稻荷宝祥院

享保八年卯六月十八日

深仙

芝辻利右衛門
(理)

右之断先達而も不申參書付も見せ不申、てつちニ只今御屋敷ヘ「罷出候而、印形致持參、宿ヘ越候様ニ申參候ニ付、理右衛門義今朝る少々」用事御座候而、南辺ヘ罷出候、帰候ハ、可申聞由ニ而、使之者承知之罷帰候、「又しほらくいたし自

分ニ出不申候まゝ、致印形越候様ニと申參候ニ付、いまた不

罷帰候由七郎右衛門使の者ニ逢申遣候

書付ヲ為持

一先達而も醍醐ヘ御窺ニ罷越、前々る段々之わけ御聞届ケ被遊候而、早ク「罷下リ利右衛門致印形、上遷宮可致旨ニ而、是も下宿ヘ宝祥院罷出」利右衛門方ヘてつち使ニ而、最前る下宿ヘ罷出居候得共、御出無之候「早ク罷出候様ニと申参、早速罷越候処、宝祥院申候者、地主ニも在之候間、」印形無

之候てハ、御聞届ケ無之旨ニ候間、是ニ■ヲつぎ候へとまゝニ
テ、「本紙写シ取致印形、一緒ニ罷出候處、伊藤吉右衛門下
御役小谷權兵衛」段々御聞届ケ吉右衛門殿御上へ被仰上候、
其御口上ニハ申上候へハ、御聞届ケ被成候間、「隨分龜抹無
之候様ニ火本入念相勤候様ニ宝祥院へ被仰渡、次ニ理右衛
門ヘも」右之通同断ニ被仰渡候、それより直ニ理右衛門義六
上御役伊藤吉右衛門殿・堀山助左衛門殿・「下御役木造勘
左衛門殿・小谷權兵衛殿・別所新八殿へ礼ニ罷越罷帰候、右
之節、「小谷權兵衛殿御申被成候ハ、定テ御目付衆へも御出
候哉と御尋候処、宝祥院申候ハ」此度ハ夜ニ入ひそかニ上遷
宮仕候ニ付、御断ハ可申入旨ニも無御座候由「申上候へハ、權
兵衛殿御申候ハ、外ノ事ハからき義ニテ御仕舞可被成候へ共、
上」遷宮之義ハおもき事ニテ候間、御断被成候て可然様ニ被
存候、当役所るハ「其元る御断無之候ても相許申候旨ニ而、
左候ハ、私義も御断可申上候と」被申候、直ニ宝祥院も被参
候■■ハ理右衛門義ハ不罷参候

一醍醐ヘ宝祥院罷登り之義ハ幸恵代・真流代迄諸事稻荷之「願
之義在之候節、理右衛門ニも奥印在之候て一緒ニ御番所へ
罷出、御断」申上候義ヲ当深仙代ニ成四ヶ年之間、願書も
無之候哉、又ハ宝祥院「壱人ニ而相済候而、理右衛門方へ何
之沙汰無之候処、此度御社破損棟」木殊之外損シ候ニ付、

■ ■ 普請仕度旨御願申上候処、普請之義下「遷宮右壱所宝祥院壱人ニ而、御聞届被成、首尾能普請成就仕候」処ニ普請成就仕候ニ付、上遷宮仕度旨御断申上候処、理右衛門方らも「先達而木造勘左衛門へ猪右衛門罷越、往古る之事候も、段々申上候処、成程先規」より御番所御帳面ニも左様ニいたし在之候由、木造殿成程承届ケ候」旨ニテ猪右衛門ニ六罷帰候、然ル所上遷宮之願ニ宝祥院罷出候処、是ハ理右衛門「奥印無之候間、理右衛門判ヲ取御出候様ニと被仰渡候処、宝祥院其座ニ而申」上候ハ、私四年いなりニ罷在候ヘ共、終ニ理右衛門奥判相頼候義無之、其上本寺「（）も私いなりへ入院之節被仰渡候ハ、本寺_{（）}外ニ指構申者無之候旨」被仰渡夫ゆへ理右衛門へも何之沙汰もいたし不申候、然者本寺_{（）}左様ニ「被仰渡候ニ付、只今私一分として御請申上、理右衛門へ印形難頼候間、「醍醐へ一応御窺申上、其上ニ而いか様共可仕旨ニテ寺社役所下り被申候、「依之役所_{（）}猪右衛門・理右衛門御召ニ付、罷出候処、往古幸恵と公事之様子」済口之所、堀山助左衛門下役三人共御立合ニ而、委細御聞届ケ被成候、其上ニテ「深仙愚痴者之様ニ御申、 ■ ■ 我等共も右之わけ共、達而申候へ共、」有無ニ合点不致候由、今一応猪右衛門ニもいなりへ罷越、合点參候様ニ「申含候へと御申渡奉畏候旨ニ而、いなりへ罷越とくと申候へとも、」

是又合点いたし不□、又御役所へ左様ニ申上候へハ、左候ハ、
醍醐へ」参候て遣可申と御申候、いよく罷登り候処、罷下
り右之通ニテ相済申候

(申)

延享二(一七四五)年一二月七日

乍恐御願申上候

桜町大道芝辻理右衛門と申者ニ而御座候
 一御当地北稻荷屋鋪之儀者、元和元卯年^{・六代以前之理右衛門}長谷川佐兵衛様御
 奉行之節、從^{御公}儀様・拝領仕、難有奉存代々
 所持「仕罷有候御事」

一元和五未年喜多見若狭守様御奉行」之節、稻荷之社建立仕
 度旨御願申上」候處、則被仰付候而建立仕置候御事

一元祿六酉年佐久間丹後守様御奉行之節」「再興之儀御願申
 上候処、被仰付候、往古^る火燃坊主あれ是山伏共賴宮守
 為致「置候處、折節其刻宝祥院周玉と申」山伏賴宮守為致
 申候故、右周玉宮守為致「申度旨御断申上候得者、御聞届
 ケ被下、右「周玉付置申候所、元祿十四年巳五月病死」仕
 候ニ付、早速大坂御番所江周玉相果申候」段、御断申上候、
 追而跡役相極メ次第可申上」旨、御断申上候、其節者大坂
 御奉行太田」和泉守様・松野河内守様御支配ニ而、「其段御
 聞届ケ被下罷帰り候内、周玉弟」福寿院と申山伏周玉跡之
 儀、其方構」被申候儀ハ有之間鋪と無躰成御訴詔」申上及
 出入ニ候處、落着仕候者、先年佐久間「丹後守被申付候通

り、今以相違無之候、「屋鋪坊社共理右衛門所持二紛無之候間、」此以後理右衛門心任セニ仕候様ニと被仰渡候、「其後醍醐三宝院様大坂御奉行所江」御訴有之、又出入ニ罷成候所、畢竟此節「相濟候者、三宝院様御下之山伏之儀ニ」候得者、宮守之儀者醍醐る進退可被成候、「屋鋪之儀ハ理右衛門拝領地ニ紛無之候間、」左様ニ相心得自今以後御番所江御届ケ」之儀ハ何ニ不寄、先年佐久間丹後守被「申付置候通り、宮守壱人ニ而者聞届ケ不申候、「地主理右衛門承届ケ加判致罷出候様ニと被」仰渡承知仕、其通りニ仕來り罷有候、依之「醍醐る宮守段々御届被成、是迄四代」相替り申候、則宮守幸恵代正徳元年卯十二月「相撲御願之節、加印仕、真流代享保元年」申十二月開帳御願之節、同■人享保三年「戌十一月修復御願之節、深仙代享保八年」卯六月上遷宮御願之節、凡右之通りニ「私江」段々相届ケ、其上ニ而加判仕、兩人共罷出候處、當「宮守是迄一度も私方江相届ケ不被申候ニ付、「其段宮守へ遂面談委細申入候得共、其儀者」醍醐る何共不被仰渡候故、今更加判頼候儀「無之と被申候而、其儘ニ打捨テ罷有候、左様ニ御座候而ハ、「御上ニ被仰付候儀違背仕候様罷成、尤「私方江參物或ハ地子代銀拵往古ら少シ」茂取來り候儀無御座、是等之儀ニ少もかがハリ「申儀ハ毛頭無御座候、拝領之屋鋪ニ紛無」御座候得共、当宮守代ニ成候而ル樹木等無断」・伐取被申、或ニ季之祭

礼之節ニモ、諸商人ら「場錢など取被申候儀も、此方江届ケ不被申」、其上御公儀様江諸事御断等被申上候ニモ「加判不仕候得者、末々ニ至拝領屋鋪之」名目も断続仕、先祖江之申分ケ茂無御座、「千万歎ケ敷奉存候、是迄之儀ハ久敷事ニ」御座候故、御役人様方ニモ御替り被成候得ハ、「おのつから中絶仕候儀も可有御座哉と乍恐」奉存候、自今以後前々之通り宮守ら私方江「被相届ケ候而、御断等ニモ加判仕候様ニ御吟味」之上先格之通被為 仰付可被下候ハ、」「難有可奉存候、以上

延享二年

丑十二月七日

芝辻理右衛門印

御奉行様

延享二(一七四五)年二月三日

申渡覺

芝辻理右衛門

稻荷社之儀其方先祖理右衛門屋敷内ニ勸請致し宮守附置候處、宝祥院周玉時分稻荷之「社地江為引越候由、右周玉相果後住之節ニ至リ」三宝院未派之由ニ而、右社僧本寺捌ニ相成候、其砌「後住之儀ニ付及出入、大坂奉行所ニ而裁許之上」後住之儀者本寺より可被申付事ニ候、社地ハ元來「其方先祖屋敷之事ニ候間、支配ニ申付當」御役所江引渡以後、稻荷之社地ニ附候、諸願書ニ「令加印候處、当住ハ加印無之、願書指出ニ付、」屋敷之由緒も致断絶歎ケ敷候、先年より「致本之通加印ニ而、書付指出候様、被仰付可被」

下旨願上候、尤先年より致し來といへとも「今程社僧三宝院之末派ニ而、全其方屋敷」構之内之鎮守ニ六難相立、堺町中之一社ニ相成候上者、社人同意ニ願書ニ致加印候儀、「道理ニ不相当候、然共稻荷之社地ニ由緒有之」者ニ候得者、代々住職之僧無隔意申請候ハ、「右之通及訴候儀者、有之間敷事ニ候處、「先年より于今如此之訴古來之由緒忘却」之仕方ニ相聞候、其方先祖稻荷之社勸請」之儀者、不及申立相知候事ニ而候、然上六住職」之僧古來之儀無断絶様ニ心掛ケ其方を、「

表立可取計筋二候、此儀者社法別段之事ニ而、「本寺江茂不掛、代々住職之者存念ニ可有之」儀ニ候条、存念を改、其方江申談、社法ニ附候」儀者格別、社地ニ附候儀ハ申通し、古来之由緒を糺し、取計念比ニいたし候ハ、出入も無之」神慮ニ茂可相叶道理ニ候、其方此度相願候」加印之儀者対談ニ而可相済事之由、宝祥院江」申聞候得ハ、委細致承知違背之存念無之候、「向後猶又其方江真実ニ可申談旨申之候、其方」儀茂無隔意申談、稻荷社之儀ニ付、諸事差支」無之様ニ取計尤之事ニ候、先祖理右衛門稻荷之」社勸請之儀、堺町中鬼門ニ当り、幸鍛治之」鎮守之神故、稻荷明神を建立致之旨、先年」出入之節大坂奉行所江指出候書付ニ有之候、「先祖理右衛門右之存念ニ候得者、全屋敷構之」内之鎮守ニいたし候所存ニ而者無之儀と相聞ヘ候、「屋敷内之鎮守を堺町中之鬼門ニ当り候逆、「勸請可致様無之道理ニ候、然者今程社僧本寺」附成公辺共ニ堺之一社ニ相立町中之鬼門之」社地ニ而自他之參詣有縁之儀者、先祖之」存念ニ相叶、猶子孫ニ至而ハ、本望成儀ニ候、然上ハ」聊之儀ニ而彼是不及異論、社地繁昌之儀を「願敷可存事ニ候、右之通宝祥院得心之上ハ、対談ニ而可相済儀ニ候条、此度願出候加印之」儀者不及沙汰候、向後者相互ニ無隔意可」申談

右御書付之趣、委細承知仕、先祖之願望ニ」相叶、後々迄縦
跡正敷罷成重々難有」奉存、於私此外可申上儀無御座候、向
後「稻荷別当と無隔意申談、社地繁昌仕候ハヽ、「先祖江之孝
行と存、御直ニ御意之趣」相守可申候、為後証書付差上申候、
以上

延享弐乙丑年十一月廿三日 芝辻理右衛門 印

御奉行所様

巳年四月一四日

覺

於 柳之町大浜ニ而成瀬隼人正殿屋敷」南北表弐拾間、東西五拾

間御当地「此屋敷所持被成候義八、其以前從「御公方様成瀬
祖父隼人正殿御直ニ」被為 下置、拝領被成候由、隼人正殿
家老衆物語ニ而承及申候、以上

成瀬隼人正屋敷預り主

巳四月十四日 芝辻理右衛門

巳年四月

覺

柳ノ町大浜ニ而成瀬隼人正殿屋敷」南北武拾間東西五拾間御当地ニ此屋敷」所持被致候義、其以前和州吉野辺」など之御代官ニ木村宗喜老と申方」御座候由、右宗喜老何か御科御座ニ而」御仕置ニ被為仰付候由其屋敷從」御公方様成瀬祖父隼人正殿拝領被致候」處、為船勝手海辺望御訴詔被申上候処、「柳ノ町大浜ニ而被為下置候、其由緒寄」諸役御免地之由ニ而、爾今当隼人正殿」代迄所持被成候由御承及申候、以上

已

四月

享和元(一八〇一)年一〇月

奉願口上之覚

一堺柳之町浜御屋敷地先年ら私相預り、則堺「公辺者柳浜町之内尾州成瀬隼人正屋敷名代」芝辻理右衛門と申振合二御座候、御屋敷表之儀者「為地子金壱ヶ年ニ金弐両宛御勘定所江」先年ら只今ニ至り差上來り申候、然所右御屋敷「際目堀垣并少々之備屋等御座候処、近年甚」及破損ニ申候、宝曆十一巳年親理右衛門相勤居「申候節、右段々致破損候ニ付、為修覆拝借」金御願申上候処、御聞届被成下置、拝借金十ヶ年「賦ニ無滯御勘定所へ返上仕、難有仕合奉存候、」然所近年甚及大破申候、普請仕度奉存候「得者、私至而困窮ニ罷在候ニ付、自力ニ難叶難儀」至極仕候、何卒金子弐拾兩拝借仕、壱ヶ年ニ「金弐両ツヽ、十ヶ年賦ニ御勘定所江無滯返上」可仕候、先例も御座候間願之通被 仰付被下「置候様仕度相済不申候ハヽ、毎歳差上申候」金子弐両ツヽ拾ヶ年之間御用捨被成下置候「ハヽ、御願を以修覆可仕候間、偏奉願候、以上

享和元年酉十月

芝辻理右衛門

笹岡文五右衛門殿

重松治兵衛殿

岩田要人殿

古畠代助殿

此通願候ゑとも不相済、又々文化八年「未七月願候処、牧野
弥太郎殿取持二て、半」金相済、亥年迄五ヶ年間、御用捨被
下候、以上